【14】四門出遊

菩薩が四つの門から園遊に出て、天人の化作する老人・病人・死人と出会って憂いに沈み、沙門と出会って出家を志す。

［A］原始聖典

①‘Buddhavaṃsa’26－16（p.098）；四種の相を見て、馬に乗って出家した（nimitte caturo divā assayānena nikkhamiṃ）。

④雑阿含604（大正02　p.167上）；此処菩薩見老病死人。

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.779下）；爾時菩薩漸漸長大、諸根具足、於閑静処作是念。今観此世間甚為苦悩、有生有老有病有死。死此生彼以此身故、不尽苦際。如是苦身何可得尽。……輒自剃鬚髪著袈裟捨家入非家。

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.783上）；（定光菩薩）伺菩薩入後園時、即往化作四人。一者老、二者病、三者死、四者出家作沙門。時菩薩見此四人已、極懐愁憂、厭患世苦、観世如是有何可貪。

⑧五分律「受戒法」（大正22　p.101中）；至年十四厳駕遊観出東城門、逢見老人頭白背僂拄杖羸歩……。出南城門、逢見病人……。出西城門、逢見死人……。……逢見一人剃除鬚髪法服擎鉢視地而行……。

⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23　p.716中）；後時菩薩養在深宮、年漸長大由見老病死故、心懐憂悩。

⑪根本有部律「波逸底迦058」（大正23　p.844上）；仏往昔為菩薩時……時漸至童年出門遊観見老病死等、遂適林中苦行六年、将為無益道成正覚普済群迷。

⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23　p.947下）；後時菩薩養在深宮年漸長大、由見老病死故心懐憂悩。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.112下）；菩薩登車遊観、逢一老人……。今可遊観、将欲出城、逢一病人……。既厳飾已出城遊観、逢一死人……。既厳駕已登車前行、於衢路中逢一沙門……。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.299下）；菩薩出四門観見老病死患、遂於三夫人処生厭離心。所謂牛護夫人鹿養夫人名称夫人、此為上首六千婇女咸皆捨棄。於其中夜踰城而去。

＊①DN.014‘Mahāpadāna-s.’（大本経　vol.Ⅱ　p.021）；ビパッシン太子は老人、病人、死人、出家者を見て出家した。

＊①MN.026‘Ariyapariyesana-s.’（vol.Ⅰ　p.163）；生法（jātidhamma）・老法（jarādhamma）・病法（byādhidhamma）・死法（maraṇadhamma）・愁法（sokadhamma）・雑染法（saṅkilesa-dhamma）を求めて出家した。

＊①MN.100‘Saṅgārava-s.’（vol.Ⅱ　p.212）；同上

＊②長阿含001「大本経」（大正01　p.006上）；菩薩（毘婆尸菩薩）欲出游観、告勅御者厳駕宝車、詣彼園林、巡行游観。御者即便厳駕訖已、還白、今正是時。太子即乗宝車詣彼園観。於其中路見一老人……。一病人……。一死人……。一沙門……。

［B］仏伝経典

①NK.（vol.Ⅰ　p.058,　南伝28　p.124）；……或日のこと、菩薩は遊苑に行きたいと思って……一人の天子を……一人の老人に作り立てた。……病人……死人……沙門……。……菩薩は出家に心を曳かれて、その日は苑へ行かれた。

②修行（大正03　p.466中）；於是王告太子、当行遊観。……始出東城門、時首陀会天、名難提和

羅、……化作老人。……駕乗出城南門、天化為病人。……出西城門、天作死人。……厳駕出北城門、天復化作沙門。

④瑞応（大正03　p.474中）；至年十四、啓王出遊。始出城東門、天帝化作病人。……太子駕乗、出南城門、天帝復化作老人。……太子駕乗、出西城門、天帝復化作死人。

④瑞応（大正03　p.475上）；出北城門、天帝復化作沙門。

⑤異出（大正03　p.618中）；太子年十歳、前白大王。為王太子。未曾出遊。……。太子乗車、出東城門、第二忉利天王釈即化作病疾人在前。……。出南城門、天王釈復化作熱病人。……。出西城門、天王釈復化作一老人。……出北城門、天王釈復化作喪車。

⑥普曜（大正03　p.502下）；爾時菩薩出東城門、……諸天化作老人。……出南城門、復於中路見疾病人。……出西城門、見一死人。……。……出北城門見一沙門。

⑦方広（大正03　p.569下）；後於一時菩薩即便欲出遊観。……出城東門、時浄居天化作老人。……出城南門、時浄居天化作病人。……出城西門、時浄居天化作死人。……出城北門、時浄居天化作比丘。

⑧LV.（Lef.　p.187，外薗・梵　p.674，外薗・訳　p.975）；かくして、菩薩は、大荘厳を以て、東の城門より園林の地に向けて出立せり。時に、……浄居天に属する天子たち（Śuddhāvāsakāyika）は、……〔老〕人を、道の前方に、示現したり。……南の城門……〔病〕人……西の城門……死せる人（死人）……北の城門……比丘。

⑪仏讃（大正04　p.005下）；時浄居天王　……　変形衰老相　……　太子見老人　……　天復化病人　……　復化為死人　……（若き日の禅定）……　爾時浄居天　化為比丘形　来詣太子所

⑫BC.（03－26）；……シュッダーディヴァーサ（Śuddhādhivāsa）神群は、……王子の出家を唆すため一人の老人を（その場に）つくりだした。……例の神々はまたしてもその身体が病いに蝕まれている一人の男をつくりだした。……死者を仕掛けた。……（若き日の禅定）……ひとりの乞食僧の装いをした男が彼のところへ近づいてきた。

⑬行経（大正04　p.064上）；王愍太子愁　勧令行遊観　始出宮城門　……　天卒化病人　……　後時復更出　天化作老人　……　後復出遊見　天化命過人　……　方便欲求出　天化作梵志

⑭過去（大正03　p.629下）；爾時太子。……出城東門、……時浄居天化作老人。……出城南門、時浄居天化作病人。……出城西門、……化為死人。……出城北門、到彼園所、……時浄居天化作比丘。……在太子前。

⑮集経（大正03　p.720上）；爾時太子。……城東門、……是時作瓶天子、……変身化作一老弊人。……（浄飯王七種夢相）……城南門出、……爾時作瓶天子、……化作一病患人。……城西門出、……時作瓶天子、……化作一屍。……城北門出、……爾時作瓶天子、……化作一人、剃除鬚髪、着僧伽梨。……在路而行、太子見已、問馭者言……名為出家。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.150，　JonesⅡ　p.145）；菩薩は父王に遊園に行きたいと言う。カピラヴァストゥ（Kapilavastu）から遊園に向う途中、浄居天子（Śuddhāvāsadevaputra）になったガティカーラ（Ghaṭikāra）が一老人を出現させる。……病人を……一死人を……黄衣を着けた一遊行者（Pravrajita）を出現させる。

⑰衆許（大正03　p.943中）；爾時太子納夫人已、思惟城外遊観園苑……乗車騎出於城外。於其馬前見一老人。……一病人。……一死人。……乗車騎出外遊観。……兜率天子……剃鬚髪身被法服、……住立馬首。……此何人耶、……是出家人。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.006下）；於時太子出東城門、……諸天化作老人。（出普曜経）

①釈迦（大正50　p.021中）；爾時太子……出城東門。（出因果経）

②歴代（大正49　p.023中）；恵王三年丁未年十四、啓父王遊。出城東門見病人廻。

③氏譜（大正50　p.090下）；経云。……出城東門、……浄居化為老人。……太子出遊南城門外、浄居天化為病人。……出城西門、路見死人……又遊北門下馬息樹、……浄居天化為比丘。……視地徐行而過太子前問。答云、我是比丘……。

④統紀（大正49　p.143下）；四十三年(辛未)太子白王将遊園林。前後導従出城東門、時浄居天化作老人。……城南門……病人……城西門……死人……城北門……比丘。

⑤JM.（p.027，畑中　p.102）；また彼は、２８才の年のアーサールハ月の満月の日に（aṭṭhavīsatime vasse Āsāḷhapuṇṇamiyaṃ）、威厳ある車駕に乗って遊園に向かって進んでいる時、老いさばらえた男を見、それから４ヶ月後のカッティカー月の満月の日に（tato catunnaṃ mānāsaṃ accayena Kattikapuṇṇamiyam）病人……４ヶ月後のパッグナ月の満月の日に（tato catunnaṃ mānāsaṃ accayena Phagguṇapuṇṇamiyam）死人を見て戻った。２９才の年のアーサールハ月の満月の日に（tato ekūnatiṃsatime vasse Āsāḷhapuṇṇamāyam）出家者の装いをした男を見……。

⑥Bigandet.（vol. I　p.052，　赤沼　p.071）；ある日、菩薩は、荘園へ赴いて、野外の遊楽を味わうと思召して、御者に命じて馬車を用意せしめ給うた。……その時諸天は、……かの四相をつづいて菩薩の御目にかけんと決心した。……老人……病人……死屍の相……沙門。此の日太子は車を返さず急いで花園に向い給うた。

【１５】夫人の懐妊とラーフラの誕生

菩薩に子供が生まれ、ラーフラと名づける（夫人が懐胎してから６年後〔=成道後〕に生まれたとするものもある）(1)。

［A］原始聖典

①‘Theragāthā’Vs.295（p.035）；人々は私を２つの事柄によって「吉祥なるラーフラ（Rāhula-bhadda）」と呼んでいる。私がブッダの子であるということ（yañ c' amhi putto buddhassa）と、法眼を持っていることとである。

⑩僧祇律「単提004」（大正22　p.332下）；仏子羅睺羅（という語あり）。

⑩僧祇律「単提042」（大正22　p.365中）；仏為菩薩時在家、父王愛惜、恐転輪王種滅。愁憂泣涙不聴出家。以懐妊羅睺羅故便捨出家。（羅睺羅が６年間胎にあったことの因縁が続く(2)）

⑪根本有部律「薬事」（大正24　p.087中）；于時羅怙羅即説頌曰……我所作此業　実無有悪意　黒縄炎熱中　六十年受苦　業報尽後身　六年在母胎

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.115上）；其耶輸陀羅因即有娠。既懐娠已生思念曰、我於明旦報菩薩知。爾時菩薩、於其夜中約縁生理、而説頌曰、所共婦人同居宿　此是末後同宿時　我今従此更不然　永離女人同眠宿

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.124中）；時耶輸陀羅、聞世尊菩薩證無上智、生喜悦曰、誕一息。斛飯王亦生一息。……為耶輸陀羅所生之息、而立其名。内宮侍女前白王曰、此子生時羅怙障月、因此応以為名羅怙羅。時斛飯王、為其子故広施如上、亦会親属與子立名。問諸人曰、此子当立何字。親属報曰、此子生日、劫比羅城人衆歓喜、可名此子為阿難陀。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.162中）；耶輸陀羅が羅怙羅を６年間懐胎していた因縁が説明されている。

⑫失訳「七仏父母姓字経」（大正01　p.159下）；今我作釈迦文尼仏子字羅云。

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.060,　南伝28　p.128）；この時、「羅睺羅（Rāhula　ラーフラ）の母〔なる王子の妃〕がお産をされた」と聞いて、スッドーダナ（Suddhodana）大王は、「予の王子に予の慶びを伝えよ」といって使者を遣った。菩薩は、それを聞いて、「邪魔（ラーフラ）が出来た。緊縛が出来た」といわれた。……王は……この語を聞き……「予の孫はラーフラ王子という名をつけよう」といった。

④瑞応（大正03　p.475上）；太子以手指妃腹曰、却後六年、爾当生男。遂以有身。

⑪仏讃（大正04　p.005上）；時白浄太子　賢妃耶輸陀　年並漸長大　孕生羅睺羅

⑫BC.（02－46）；……時経て、可愛らしい乳房をそなえ、（白雲のごとき）己が名声を持するヤショーダラー（Yaśodharā）妃とシュッドーダナ（Śuddhodana）王の子のあいだに、その顔容ラーフの敵（月）と紛う息子、ほかならぬラーフラ（Rāhula）と名づくる息子が誕生した。

⑭過去（大正03　p.632中）；王語太子……唯願為我、生汝一子、然後絶俗。……太子、……即以左手、指其妃腹。時耶輸陀羅、便覚體異、自知有娠。

⑮集経（大正03　p.727上）；（国師の子優陀夷は王の命で、太子の出家を防止する為、種々の娯楽に誘う）便入宮中、共諸婇女、行於五慾。……其太子妃耶輸陀羅、即於是夜、便覚有娠。

⑮集経（大正03　p.888上）；其羅睺羅、……在胎六年。……過六年已、……其羅睺羅、便即出生。（王は出家後六年出生を聞き怒るが、世尊が書を出して疑を解く）

⑯MV.（vol.II　p.159,　JonesII　p.154）；（出家の時）ラーフラ（Rāhula）はトゥシタ（Tuṣita）天を去り、真夜中に母の胎に入る。

⑰衆許（大正03　p.945下）；爾時悉達多太子、……思惟。我今雖有耶輸陀羅、娯閑迦、蜜里誠惹、……若無男女便去修行、衆人俱言、悉達多太子非是丈夫。出別之後、即令耶輸身有懐妊。

⑰衆許（大正03　p.950下）；王聞是語（成道）……及奏王云、甘露飯王生其一子、耶輸陀羅亦生一子。……耶輸陀羅生子之時月有蝕障、名羅護羅。（王の疑い→石に載せ池中へ→疑い解ける）

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.024上）；唯願為我生汝一子、然後絶俗……。（出因果経）

③氏譜（大正50　p.090中）；修行瑞応経云。諸人咸疑太子不男。便指妃腹曰、却後六年爾当生男。遂以有娠。

④統紀（大正49　p.144上）；五十年戊寅　太子年二十五歳……往父王所……唯願聴我出家学道。……太子即以右手、指其妃腹、便覚有娠……。

④統紀（大正49　p.146上）；仏成道日斛飯王……是歳耶輸夫人生子名羅睺羅。

⑤JM.（p.027,　畑中　p.103）；（出家を見た日）まさしくその日（Tasmin yeva divase）、ラーフラバッダ（Rāhulabhadda）が生れたのである。

⑥Bigandet.（vol. I　p.058,　赤沼　p.077）；（沙門に会った後）丁度太子がその馬車に乗り込み給うた時、父王の使臣は恭しく御妃耶輸陀羅姫の王子を安産し給うたという喜びを申し上げた。これを聞いて太子は極めて冷静に「これぞ私が破らねばならぬ新しい強い緊縛である」と答え給うた。……王はこの太子の語に依って王孫に羅睺羅（Raowla）という名を与えられた。

（1）［B］の④、⑮、⑰、［C］の③④である。

（2）ラーフラの６年在胎の因縁は、「有何因縁羅睺羅六年在胎。仏告諸比丘。往昔有仙人、名梨波都。詣王求相見。王報仙人。汝且住無憂園中、須臾当與相見。作是教已、乃至六日不與相見。爾時王者羅睺羅是。以是因縁故、六年在胎。如生経中広説」（『僧祇律』大正22　p.365下）とされる。

【16－01】出家の前兆----浄飯王の夢

浄飯王が菩薩の出家する夢を見る。

［A］原始聖典

［B］仏伝経典

⑥普曜（大正03　p.502下）；父王白浄、寐夢睹見菩薩出家楽於寂然諸天囲繞。又見剃頭身着袈裟。時従夢覚。

⑦方広（大正03　p.569下）；諸天勧発菩薩已。菩薩是時現夢於輸檀王。……乃見菩薩、剃除鬚髪行出宮門。……

⑦方広（大正03　p.571上）；時浄居天欲令菩薩速疾出家、重與父王作七種夢。一者夢見有帝釈幢衆多人舁従迦毘羅城東門而出。二者夢見太子乗大香象徒馭侍衛従迦毘羅城南門而出。三者夢見太子乗駟馬車従迦毘羅城西門而出。四者夢見有一宝輪従迦毘羅城北門而出。五者夢見太子在四衢道中揚桴擊鼓。六者夢見迦毘羅城中有一高楼太子於上四面棄擲種種珍宝無数衆生競持而去。七者夢見離城不遠忽有六人挙声号哭。時輸檀王作是夢已。

⑧LV.（Lef.　p.185,　外薗・梵　p.670,　外薗・訳　p.974）；菩薩は、かの天子によって勧発せられたる時、シュッドーダナ（Śuddhodana）王にこの夢を示現せり。すなわちシュッドーダナ王は、……菩薩が……夜半に天神に囲繞せられて〔城外に〕去り行くを……また〔菩薩が〕出家して遊行者となり、袈裟衣をまとえるを見たり。

⑮集経（大正03　p.721上）；爾時作瓶天子、以神通力、欲令太子発出家心。即於其夜、與浄飯王七種夢相。時浄飯王、眠臥床上、於睡夢裏、見如是相。第一所謂夢見、有一大帝釈幢、其幢周匝、有於無量無辺人、挙従迦毘羅城東門出。第二所謂夢見、太子乗十大象、駕馭衆車、従迦毘羅城南門出。第三所謂夢見、太子駕駟馬車、端坐其上、従迦毘羅城西門出。第四所謂夢見、雑宝荘厳一輪、従迦毘羅城北門出。第五所謂夢見、太子在迦毘羅城之中央大街衢内、手執一搥、撾打大鼓。第六夢見、此迦毘羅城之処中、有一高楼、太子坐上、四面散擲無量諸宝、而其四方、復有無量無辺億数諸衆生、来将此宝去。第七夢見、此迦毘羅城外不遠、有於六人、挙声大哭、号咷流涙、各以兩手、自抜頭髪、宛転于地。（東門出遊後、南門出遊前）

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.133,,　JonesⅡ　p.129）；シュッドーダナ（Śuddhodana）は夢を見た。息子よ、私は夢の中で一匹の象が宝石の浴場から飛び出すのを見た。

⑰衆許（大正03　p.945下）；時浄飯王自説其四夢。一夢満月有其蝕障、二夢日出復於東没、三夢大人衆来禮拜、四夢自身笑而復哭。

［C］後世の仏伝資料

【16－02】出家の前兆----マハーパジャーパティーの夢

マハーパジャーパティーが白牛がカピラヴァットゥから走り去る夢を見る。

［A］原始聖典

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.115中）；爾時大世主夫人、於其夜中見四種夢。一者見月被蝕、二者見東方日出便即却没、三者見多有人頂禮夫人、四者見其自身或笑或哭。

［B］仏伝経典

⑮集経（大正03　p.727上）；又当其夜、太子姨母憍曇姓氏摩訶波闍波提、眠中夢見一白牛王、在於城中、揚声吼喚、安庠而行、無有一人能当彼前而作障碍。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.134,　JonesⅡ　p.130）；彼の伯母（mātuḥsvasṛ）も又夢を見た。可愛らしいこぶをもった白牛がカピラヴァストゥ（Kapilāhvaya）から走り去るのを夢の中で見た。

［C］後世の仏伝資料

【16－03】出家の前兆----太子夫人の夢

太子夫人（ヤソーダラーあるいはゴーパー）が不吉な夢を見る。

［A］原始聖典

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.115中）；爾時耶輸陀羅復於此夜見八種夢。一者見其母家種族皆悉破散、二者見與菩薩同坐之床皆自摧毀、三者見其兩臂忽然皆折、四者見其牙歯皆悉堕落、五者見其髪鬚悉皆堕落、六者見吉祥神出其宅外、七者見月被蝕、八者見日初出東方便即却没。

［B］仏伝経典

②修行（大正03　p.467下）；勧太子去時裘夷見五夢。

⑦方広（大正03　p.571下）；是時耶輸陀羅亦夢二十種可畏之事、忽然覚悟中心驚悸惶怖自失。菩薩問言、何所恐懼。耶輸陀羅啼哭而言。太子、我向夢見一切大地周遍震動。復見一鮮白大蓋常庇蔭者車匿輒来奪我将去。復見有帝釈幢崩壊在地。復見身上瓔珞為水所漂。復見日月星宿悉皆隕墜。復見我髪為執宝刀者割截而去。復見自身微妙端正忽成醜陋。復見自身手足皆折。復見形容無故赤露。復見所坐之床陥入於地。復見恒時共太子坐臥之床四足倶折。復見一宝山四面高峻為火所焼崩摧在地。復見大王宮内有一宝樹被風吹臥。復見白日隠蔽天地黒暗。復見明月在空衆星環拱。於此宮中忽然而没。復見有大明燭出迦毘羅城。復見此護城神端正可喜住立門下悲号大哭。復見此城変為壙野。復見城中林木泉池悉皆枯竭。復見壮士手執器仗四方馳走。

⑧LV.（Lef.　p.194,　外薗・梵　p.686,　外薗・訳　p.981）；（22）ゴーパー（Gopā）〔妃〕と王子とが、ひとつの寝台に横臥して休める時、ゴーパーは、夜も更けたる丑三つ時に、かくの如き夢を見たり。この全大地が、峰の聳える山岳もろともに、振動せり。諸の樹木は風に吹き荒らされ、根こそぎ抜かれて、地面に倒れたり。（23）太陽と月とが、星辰の瑩飾もろともに、天空より地上に落下し、右手に髪毛が引き抜かれ、頭冠の砕け落ちるを見たり。手が切断せられ、また、足も切断せられ、自ら裸身なるを見たり。己が身の真珠瓔珞、また、金帯や宝珠の、切断せられたるを見たり。（24）寝台の四本の脚が折れて、地面の上に横たわれるを見たり。王の傘蓋の、鮮彩にして光輝ある、美しき把手の折れたるを見たり。また、あらゆる装身具が落ちて、散乱し、それらは水に流失せり。夫の装身具も、衣服や頭冠もろともに、寝台の上にありて雑乱す。（25）都城より、諸の炬光去り行き、城下は暗黒に覆われたるを見たり。宝石より成る、浄厳なる網縵の、切断せられたるを、夢に見たり。垂下せる真珠瓔珞が落下して、大海が動乱し、その時、山王メールが根底より振動するを見たり。（26）これら、かくの如き夢を、シャーキヤ族の后妃（ゴーパー）は眠りの中に見たり。

⑬行経（大正04　p.063下）；太子妃寐　夢睹憂変　太子出家　捨宮婇女　逃入山沢　妃独逐走　従後求哀　莫相捐棄

⑭過去（大正03　p.632下）；爾時耶輸陀羅、眠臥之中、得三大夢。一者夢月堕地、二者夢牙歯落、三者夢失右臂、得此夢已。

⑮集経（大正03　p.727中）；爾時其夜、耶輸陀羅、疲極睡眠、無所知暁、臥夢睹見。有二十種可畏之事、心戦身動、恐怖不安、疑怪驚惶、忽然而寤。時太子問耶輸陀言。汝耶輸陀、何故如是驚怖戦悸、気喘心忪、忽爾而起。何故如是、汝耶輸陀、今者又不在尸陀林、又復不為諸屍所繞、亦不在山、不居曠野。今此城内、無量無辺、兵仗守護、在於王宮、此処深牢、不懼野獣、亦復不慮盗賊来驚。此中安楽、是無畏処。我今見汝耶輸陀羅、心大驚怖、心大憂愁、心生疑畏、忽然覚寤、此事何因。爾時太子妃耶輸陀、涙下如雨、恐怖悲咽、報太子言。大聖太子、我於今夜、夢見如是二十種変、唯願諦聴、我当説之。聖子、我向夢見、一切大地、周匝震動、聖子、次復夢見、有帝釈幢崩倒於地。聖子、次復夢見虚空日月、及諸星宿、悉皆堕落。聖子、次復夢見、有一最大鮮潔傘蓋、是我従来依蔭之処、守護我者、憐愍我者、而彼婢生車匿之子、忽以荘力、奪我将行。聖子、次復夢見、我頭髪髻、為彼諸宝所荘厳者、刀截而去。聖子、次復夢見、我身體上所有瓔珞。為水所漂。聖子、次復夢見、我之身形微妙端正。忽成醜陋。聖子、次復夢見、我身體上所有手足、自然堕落。聖子、次復夢見、我此身形忽然赤露。聖子、次復夢見、我之従来常所坐床、我坐之時、承事聖子、彼床忽然自蹈於地。聖子、次復夢見、我常所共、聖子眠臥受楽之床、彼床四脚、並皆摧折。聖子、次復夢見、有一衆宝、所成大山、纖利四楞、無量高峻被火所焼、崩頽堕地。聖子、次復夢見、浄飯大王宮内、有一微妙之樹、被風吹倒。聖子、次復夢見、朗月円団衆星囲遶、在此宮中、忽然而没。聖子、次復夢見、浄日照明、千光囲遶、在此宮内、忽然而没、彼隠没後、世間黒暗、無有光明。聖子、次復夢見、此宮城内、有一火炬、出向城外。聖子、次復夢見、此城従来所護之神、遍體種種、瓔珞荘厳、可喜端正、彼忽悲啼、挙声大哭、住在門外。聖子、次復夢見、迦毘羅城、忽為曠野、可畏如夜、心無処楽。聖子、次復夢見、迦毘羅城、所有諸池、水悉皆濁、所有樹林、華果枝叶、並皆堕落、遍散於地、無可観瞻。聖子、次復夢見、所有荘士、手執刀杖、身着甲鉾、周匝四方、交横馳走。聖子、我見如是二十種夢。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.135,　JonesⅡ　p.130）；ヤショーダラー（Yaśodharā）もまた夢を見た。一群の雲が王宮をとり巻き、雷と豪雨をともなった光明が三つの世界を輝らした。

⑰衆許（大正03　p.945下）；耶輸陀羅亦説八夢。一夢上族離散、二夢吉祥座破、三夢腕釧損墜、四夢牙歯堕落、五夢髻髪乱垂、六夢吉祥雲出於宮舎、七夢満月有其蝕障、八夢日出未高復於東没。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.24上）；爾時耶輸陀羅眠臥之中。得三大夢。（出因果経）

④統紀（大正49　p.144中）；耶輸臥中即得三夢。

【16－04】出家の前兆----菩薩の夢

菩薩が須弥山を枕にし、手足で大海を撹拌するなどの夢を見る。

［A］原始聖典

⑩僧祇律「僧残001」（大正22　p.263中）；何者実夢。所謂如来為菩薩時、見五種夢如実不異。是名実夢。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.115中）；菩薩於夜中見五種夢。一者見其身臥大地、頭枕須彌山、左手入東海、右手入西海、双足入南海。二者見其心上生吉祥草高出空際。三者見諸白鳥頭皆黒色、頂禮菩薩所欲騰空、不過菩薩膝下。四者見於四方雑色諸鳥、至菩薩前皆同一色。五者見雑穢山菩薩在上経行来去。

［B］仏伝経典

⑦方広（大正03　p.572上）；其夜菩薩自得五夢。一者夢見身席大地頭枕須彌手擎大海足践渤澥。二者夢見有草名曰建立従臍而出其杪上至阿迦膩吒天。三者夢見四鳥従四方来毛羽斑駁承菩薩足化為白色。四者夢見白獣頭皆黒色咸来屈膝舐太子身。五者夢見有一糞山状勢高大菩薩身在其上周匝遊践不為所汙。

⑧LV.（Lef.　p.196,　外薗・梵　p.694,　外薗・訳　p.984）；福徳と威光とを積集し、栄えある威光の精髄を有する彼（菩薩）は、次の如き、瑞相（前兆）を夢に見たり。……彼は巨大なる手と足とを以て、四大海の水を撹拌し、……高顯なるメール（Meru）山を枕となせるを〔夢に〕見たり。

⑨僧伽（大正04　p.122下）；是時菩薩夢見。以此世界為床、須彌山為机。

⑮集経（大正03　p.728上）；爾時太子其夜自復見五大夢。第一夢見、席此大地、持用作榻以須彌山、安為頭枕、東方大海、安左手臂、西方大海、安右手臂、南方大海、安置兩足。第二夢見、有一草茎、名曰建立、従臍而出、其頭上至阿迦膩吒。第三夢見、有四飛鳥、作種種色、従四方来、在於太子兩足之下、自然変成、純一白色。第四夢見、有四白獣、頭皆黒色、従足已上、乃至膝頭、舐太子子脚。第五夢見、有一糞山、高大峻広、太子自身、在彼山上、周匝経行、不為彼糞之所汚染。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.136,　JonesⅡ　p.131）；菩薩もまた五つの大きな夢を見た。菩薩は悟りを開く前に夢を見るものである。１．この大地が彼の広く高い寝床となり、山の王スメール（Smeru）は枕となる。左腕を東の太洋に、右腕を西の太洋に両足を南の太洋に安置する。２．クシーリカー（kṣīrikā）という草が臍から生じ、天に向ってのびる。３．黒色の頭をもった赤色の動物が、彼の足の裏から膝頭まで覆って立つ。４．異なった色の四匹の禿げ鷲が四方から飛んできて、彼の足裏をなめて、白色になって飛び去る。５．大きな糞の山を汚されることなく、歩き回る。

⑰衆許（大正03　p.945下）；即時太子復自思惟。曾作五夢。一夢床座如妙高山坐臥自在。二夢兩手左托東海右托西海、復以二足垂南海中。三夢花果樹木及諸藥草長至天界。四夢大身飛禽其類甚衆、形白頭黒、及諸小鳥種種顔色、四方而来都至面前、変為一色而禮其足。五夢大石山上経行顧望。

［C］後世の仏伝資料

⑤JM.（p.028,　畑中　p.105）；（出家・苦行の後）35才の年の（pañcatiṃsatime vasse）ヴェーサーカ月の半月の１４日目に（cātuddasiyā pakkhassa）、５つの大いなる夢を見……。

⑥Bigandet.（vol.Ⅰ　p.080,　赤沼　p.107）；（修闍多が供養を準備中に）その夜、菩薩は五つの夢を見給うた。第一は、大地を床とし、比摩羅耶山を枕とし……。

【17－01】出家----美女たちの熟睡中の姿態

菩薩が宮廷の美女たちのだらしなく、死人のように熟睡する姿を見て、世を厭う(1)。

［A］原始聖典

⑧五分律「受戒法」（大正22　p.102上）；菩薩為諸妓女所娯楽已、便得暫眠。衆妓女輩皆淳惛而寐。菩薩尋覚、観諸妓直更相荷枕、或露形體如木人状、鼻涕目涙口中流涎、琴瑟箏笛縦横在地。又見宮殿猶如丘墓。菩薩見已三反称言、禍哉禍哉……。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.115中）；当此之夜。婇女倡伎悉皆疲倦、昏悶眠睡。或頭髪披乱、或口流涕唾、或復譫語、或半身露。菩薩見此、雖在深宮猶如塚間見諸死人。

［B］仏伝経典

①NK.（vol.Ⅰ　p.061，南伝28　p.131）；菩薩は眼を覚まして、臥榻の上に足を組みあわせて坐ったまま、彼の婦人たちが楽器を擲り出して臥ている〔相〕を眺められた。

②修行（大正03　p.467下）；時難提和羅、化諸宮殿、尽為塚墓。裘夷伎女皆成死人、骨節解散、髑髏異処。……

④瑞応（大正03　p.475中）；太子徐起、聴妻気息、視衆伎女、皆如木人。百節空空、譬如芭蕉。

⑥普曜（大正03　p.504下）；爾時法行天子、浄居天子、来入宮殿自現形像、娯楽之形無常之変。……爾時菩薩普観眷属、視衆伎女猶如木人。百節空中、譬如芭蕉中無有実。

⑦方広（大正03　p.573中）；爾時法行天子及浄居天衆、以神通力令諸婇女形體姿容悉皆変壊。所処宮殿猶如塚間。……爾時菩薩見於宮内所有美女形相変壊。

⑧LV.（Lef.　p.205，溝口　p.185）；神々の首領達によって勧告されて、かの菩薩は一瞬後宮の様子を見回して考えられた。そして女達が嫌悪感を催すような光景を現しているのを見て言われた。本当に私は墓場の真ん中に住んでいる！と。

⑪仏讃（大正04　p.009下）；時浄居天子　知太子時至　決定応出家　忽然化来下　厭諸伎女衆　悉皆令睡眠　容儀不歛摂　委縦露醜形　……

⑫BC.（05－47）；するとそのとき、苦行のすぐれた功徳をそなえたアカニシュタ（Akaniṣṭha）神群は王子のこの決断のほどをさとって、女たちに一度に眠気を催さしめ、彼女たちの身体の動きに（ぶざまな）変化あらしめた。

⑬行経（大正04　p.068上）；寤寐尋起　見婇女眠　瓔珞迸散　失棄楽器　衣裳発露

⑭過去（大正03　p.632下）；太子即従坐起、遍観妓女及耶輸陀羅、皆如木人。譬若芭蕉中無堅実。

⑮集経（大正03　p.728下）；是時衆中、有一天子名曰法行。来至宮内、以神通力、令諸婇女身體服飾縦横不正。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.159　，JonesⅡ　p.155）；（ラーフラ〔Rāhula〕がトゥシタ〔Tuṣita〕天より母胎に入った直後）菩薩は目を覚まし、女たちが眠っているのを見た。ある者は楽器を抱き……。菩薩は彼等が後宮の床に横たわっている様を見たとき、墓場にいるとの想いが生じた。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.007上）；時菩薩夜観妓女、百節空中。（出普曜経）

①釈迦（大正50　p.024中）；太子即従座起、遍観妓女及耶輸陀羅。（出因果経）

⑥Bigandet.（vol.Ⅰ　p.060，赤沼　p.081）；菩薩は中夜の少し前に眼をさまして臥榻し給うた。周囲を眺め見廻せばさてもいろいろに浅間布き姿の多きことよ。

（1）出家年齢については、本研究の第１号中の「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」のpp.103～108を参照されたい。

【17－02】出家----出城

菩薩が出家を決意し、御者のチャンナ（Channa）を伴い、馬のカンタカ（Kanthaka）に乗って出城しようする。

［A］原始聖典

①DN.004‘Soṇadaṇḍa-s.’（種徳経　vol.Ⅰ　p.115）;沙門ゴータマは父母が欲しないのに、涙を流し、泣いているのに、髪と鬚を剃り、袈裟衣をまとって、家から非家に出家した（Samaṇo

khalu bho Gotamo akāmakānaṃ mātā-pitunnaṃ assu-mukhānaṃ rudantānaṃ kesa-massuṃ ohāretvā kāsāyāni vattāni acchādetvā agārasmā anagāriyaṃ pabbajito）。

①MN.026‘Ariyapariyesana-s.’（vol. I　p.163）；私は後に年若く漆黒の髪をもち、美しさ若さを有し、第一期にあるにかかわらず（paṭamena vayasā）、父母が欲しないのに、涙を流し、泣いているのに、髪と鬚を剃り、袈裟衣をまとって、家から非家に出家した。

②長阿含022「種徳経」（大正01　p.095中）；沙門瞿曇初出家時父母涕泣、愛惜恋恨……。

③中阿含204「羅摩経」（大正01　p.776中）；我於爾時父母啼哭諸親不楽。我剃除鬚髪着袈裟衣、至信捨家無家学道。

⑧五分律「受戒法」（大正22　p.102上）；於是菩薩勅奴闡陀、汝起被馬勿令人聞。闡陀白言、夜非行時不応遊観、又無怨敵逼於上宮。不審何故夜勅被馬。太子答言、有大怨敵汝不知耶、老病死怨。怨之大者。汝速被馬勿得稽留。即被白馬牽至中庭、白言馬已来此。菩薩便到馬所、将欲跨之。馬大悲鳴。天神恐有留難、即散馬声令人不聞。菩薩跨馬向閤、閤即自開。復向城門、門亦自開。

⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23　p.911上）；爾時菩薩遍観一切老病死已、諸天囲繞、便於夜半踰城出家往勤苦林。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.115下）；爾時菩薩発心欲出。大梵天王及帝釈等、知菩薩念応時而至、合掌恭敬而説頌曰、……。

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.061，南伝28　p.132）；菩薩は「予は今日こそ大出家を遂げなければならない」と〔決心して〕臥榻から立ち上がり……「其処にいるのは誰か」といわれた。……チャンナ（Channa）は、「王子さま、チャンナでございます」と答えた。（王子）「予は今日大出家を遂げようと思う。予に馬の用意をしてくれ」（チャンナ）「畏りましてございます」といって、……厩に行った。……犍陟（カンタカ　Kanthaka）馬王を見て、「今日はこの馬を用意しなければならぬ」と思って、犍陟を用意した。

②修行（大正03　p.467下）；至年十九、四月七日、誓欲出家。至夜半後、明星出時、……即呼車匿、急令被馬。……於是城門自然便開、出門飛去。

④瑞応（大正03　p.475中）；至年十九、四月八日夜、天於窓中、叉手白言。時可去矣。……即呼車匿、徐令被馬……踰出宮城。

⑤異出（大正03　p.619上）；夜半時、四天王、従天窓中来、呼太子曰。時到可去。……踰屋出城。

⑥普曜（大正03　p.505下）；爾時菩薩告車匿曰。車匿、速起厳被白馬、今日人尊宜吉祥時、応当出去。

⑦方広（大正03　p.574下）；菩薩作是思惟、於今夜静出家時到。即就車匿而語之言。車匿汝宜為我被乾陟来。

⑧LV.（Lef.　p.210，溝口　p.190）；かの菩薩は真夜中の時刻が来たのを知って、チャンダカ（Chandaka）に言われた。チャンダカよ、もはやぐずぐずできない。装飾品で飾られた馬の王を連れてきてくれ。

⑨僧伽（大正04　p.122下）；是時菩薩志性不可廻転如所説。如月初出於幽冥処衆人所敬。即従座起欲得出家。

⑩十二（大正04　p.146下）；仏以二十九出家。

⑪仏讃（大正04　p.010上）；爾時浄居天　来下為開門　太子時徐起　……　而告車匿言　吾今心渇仰　欲飲甘露泉　被馬速牽来　……　飄然超出城

⑫BC.（05－66）；……（女の本性と変容との）懸隔をさとり、いまこそ好機だと思った彼には、この夜のうちに出家してしまおうという意欲がこみあげてきた。すると、彼の意中を知った神々

は、彼のために御殿の扉を開け放した。……彼は足の速い馬丁チャンダカ（Chandaka）を起こしてつぎのように言った「急ぎ駿馬カンタカ（Kanthaka）を連れてきてくれ。私は今日ただいま、ここより不死（の境地）に到達するため、出かけたいのだ……」……父王の都より出ていったのでああった。

⑬行経（大正04　p.068下）；即従坐起　意計決定　……　即時出宮　……　即以方便　覚起車匿　以柔軟声　告語車匿　速取良馬　犍陟使来

⑭過去（大正03　p.632中）；爾時太子心自念言。我年已至一十有九今是二月復是七日。宜応方便思求出家。

⑭過去（大正03　p.636上）；阿私陀仙昔相太子。年至十九出家学道必当成就一切種智。

⑮集経（大正03　p.730上）；爾時太子仰瞻虚空如是思惟。今中夜静鬼宿已合……宜出家也。……即喚同日所生奴子車匿告言。……急被帯我同日所生馬王乾陟将前着来。

⑮集経（大正03　p.745下）；爾時菩薩従兜率天下来之時入釈種胎欲受生日。彼時先於其跋伽婆仙人林中所居之処自然涌出二金色樹……而彼二樹当於菩薩出家之夜忽然没地。……菩薩即問彼仙人言。尊者彼等二樹出来幾時。仙人答言。到今已来二十九年。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.161,　JonesⅡ　p.157）；かくて菩薩は、軍隊や財産や王位や家族を棄て、家住から遊行の生活に入っていった。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.299,　JonesⅡ　p.280）；菩薩は２９才になり（ekūnatriṃṣo vayasānuprāpto）、成熟に達した時、彼は王国と七宝を捨て、黄衣を着けた。

⑰衆許（大正03　p.946上）；爾時帝釈天主及梵天王告太子言。……早出宮殿明相現前證一切智。……菩薩下之即覓餐那令被馬王。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.007上）；即勅車匿起被揵陟。（出普曜経）

①釈迦（大正50　p.024上）；爾時太子心自念言。我年已至十九、今又是二月復是七日。（出因果経）

②歴代（大正49　p.023中）；八年壬子年十九、四月八日夜半踰城出家。十二遊経云、仏二十出家。増一阿含第二十四巻云、我年二十九、出家欲度人故。又云、年二十在外道中学。長阿含亦云、年二十九出家。推其大例如来在世七十九年、若二十九出家三十五成道、所可化物唯応四十五年。而禅要経云、釈迦一身教化衆生四十九年。諸経多云、十九出家。今以此為正。

③氏譜（大正50　p.090下）；経云。至年十九、思出家時将已至矣。到父王……白言、思欲出家、必願聴許。……因果云、我年十九、今二月七日出家時至。

④統紀（大正49　p.145上）；述曰。按瑞応・因果・中本紀・大論、並云十九出家。十二遊、増一中雑長四阿含、出曜経和須蜜論、並云二十九出家。……今以如来八十寿除五十説法、則定取梵網・無相三昧・宝蔵経等、三十成道之言。若以三十成道除六年苦行、則定取荊渓二十五出家。

⑤JM.（p.027,　畑中　p.103）；彼は夜半時に目覚め、浄らかな螺貝のごとく、白いカンタカ（Kanthaka）と呼ばれる王馬に乗り、チャンナ（Channa）の馬の尾につきそわせて、大出離をなそうと大門に到着した。一夜のうちに、３王国を越えて３０由旬の道（tiṃsayojanikaṃ maggaṃ）を進み、アノーマー（Anomā）河の岸辺に到着した。摩訶薩はまた、そこで出家したのだが……アヌピヤ（Anupiya）と呼ばれるマンゴ樹林で７日間の（sattāhaṃ）出家の至福をもって過ごした。

⑥Bigandet.（vol.Ⅰ　p.061,　赤沼　p.082）；太子は今や不動の決心を以て自ら宣う様、「今日今時只今から、閑寂の地に隠退するであろう」と。……「車匿（Tsanda）よ……私の為に、一番足の駛い馬を用意して呉れよ」……太子の出城は実にアニュジャーナ紀元九十七年であった。

【17－03】出家----悪魔が出家を止めようとする

悪魔が菩薩に転輪聖王になるように勧め、出家を止めようとする。

［A］原始聖典

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.063,　南伝28　p.135）；この瞬間に魔王（Māra）が、〔菩薩を還らせよう〕と思って……「あなたは出ていってはなりませぬ。あなたはこれから七日目に輪宝が現れて来ます。……」と云った。（菩薩）「そなたは誰か」（魔王）「私はヴァサヴァッティン（Vasavattin）天であります。」（菩薩）「魔王よ、……予には王位は要らないのだ。予は一万世界を鳴り響かせて仏と成るであろう。」

⑮集経（大正03　p.732上）；爾時欲界魔王波旬、見於太子初出家時、為欲恐怖於太子故、以神通力、化作諸声。……爾時浄居諸天、……将彼魔王波旬、擲着無量百千由旬之外、勿使障碍太子出家。

［C］後世の仏伝資料

⑤JM.（p.027,　畑中　p.103）；その時マーラ（Māra）が摩訶薩に言った。「大雄よ、出家するでない。これより７日後に（sattame dine）汝のために天の輪宝がまことあらわになるであろう」と。

⑥Bigandet.（vol. I　p.062,　赤沼　p.084）；悪魔（Manh Nat）は菩薩の出家を止め、成道を妨げようと決心した。

【17－04】出家----賁識が道標となって天道を示す

賁識という名の神が出城した菩薩の前に現われ、天道・人道・悪道のうちの天道を示す。

［A］原始聖典

［B］仏伝経典

④瑞応（大正03　p.475下）；即起上馬、将車匿前行数十里、忽然見主五道大神、名曰賁識。……所居三道之衢、一曰天道、二曰人道、三曰三悪道。……示以天道曰、是道可従。

⑤異出（大正03　p.619中）；行十数里、見一男子、名曰賁識。賁識者、鬼神中大神。……賁識所立処者有三道、一者天道、二者人道、三者泥犁悪人之道。……賁識即以天道示之、此道可従。

⑥普曜（大正03　p.507下）；於是菩薩稍進前行、覩五道神名曰奔識、住五道頭。

［C］後世の仏伝資料

【17－05】出家----剃髪し、狩人と衣服を交換する

出城した菩薩がアノーマー（Anomā）河を渡ったところ（あるいはマッラ国のアヌピヤー）で馬を降り、剃髪して、チャンナを帰らせ狩人と衣を交換する。

［A］原始聖典

②長阿含001「大本経」（大正01　p.007上）；太子於後即剃除鬚髪服三法衣、出家修道。

④雑阿含604（大正02　p.167上）；此処菩薩脱瓔珞與車匿、遣馬還国。……又此処菩薩従猟師易袈裟衣、被此衣已而為出家。

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.779下）；時菩薩強違父母、輒自剃鬚髪著袈裟捨家入非家。

⑧五分律「受戒法」（大正22　p.102上）；既出門已向阿兔耶林、去城不遠。便下馬脱宝衣、語闡陀言。汝可牽馬并持宝衣還宮道。……菩薩前行、見一猟人著袈裟衣。往至其所、以所著衣價直百千、用以貿之得著而去。菩薩復前向須摩那樹、樹下有剃頭師。求令除髪。即為剃之。釈提桓因如屈伸臂頃至菩薩前、以衣承髪持還天宮。剃已作是念、我今已為出家自然具戒。

⑪根本有部律「薬事」（大正24　p.030下）；（勝身城から弥替羅に至り、そこから阿耨井に至り、またそこから随路而至）我昔為菩薩時天帝釈作猟師形被一雑色衣。我時為出家故脱於細軟上服而與換之。有信婆羅門居士等因従此地、建立受袈裟塔乃至今日、諸苾芻咸皆禮拜供養。天帝釈将我迦施迦衣……。我昔為菩薩時以青蓮花色剣自割我髻、擲於空中。有信心婆羅門居士便於此地建立割髻塔。諸苾芻今応禮拜供養。于時天帝釈持我髪髻……。我昔行菩薩道時闡陀迦於此地、将我乾闥伽馬王却還本宮。有信心婆羅門居士復於此地立馬廻塔。諸苾芻至今供養。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.117中）；是時菩薩、以二更中、行十二踰膳那、従馬而下、即解瓔珞告車匿曰。汝可将馬及我瓔飾従此廻去。……爾時菩薩即於車匿手中取其所執之刀。其刀軽利、青光湛色如青蓮花葉。既抜其刀即自割髪擲虚空中。釈提桓因於虚空中即便捧接、将往三十三天。毎至此日集三十三大衆旋繞供養。其割髪之地信心長者婆羅門等営一宝塔名曰割髪地塔。苾芻俗人常応供養。……時天帝釈観其下界、乃見此衣在樹空中便往取之身自被著。作老猟師形状、執持弓箭與菩薩相近、菩薩告曰。此是出家人衣、我衣貴妙是俗人服、今欲相換可得以不。……諸婆羅門居士長者共於此地造一制底、名為受出家衣塔。

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.064,　南伝28　p.137）；（アノーマー〔Anomā〕河を渡ったところで）菩薩は馬の背から下り……車匿（Channa）を呼んで云われた。（菩薩）「友車匿よ、おまえは予の瓔珞と犍陟（Kanthaka）とを伴れて還ってくれ、予は出家をする。」……菩薩は……考えられた。「予のこの毛髪は沙門に相応しくない」と。だが、菩薩の毛髪を切るに適するものは他にはなかったので、……右の手に刀を取り、左の手に頭被と髻とを一緒に攫んで切られた。毛髪は長さ二指量（aṅgula　アングラ）で、……毛髪の長さは菩薩の一生を通じてそれだけであった。……次に菩薩は考えられた。「このカーシ国産の衣服（Kāsikavattha）は沙門たる予には相応しくない」と。すると迦葉仏（Kassapabuddha）の頃、菩薩の旧い友人であったガティーカーラ（Ghaṭīkāra　瓦師）という大梵天が、……八種の沙門の道具を持って来て献じた。

②修行（大正03　p.468上）；天暁行四百八十里、到阿奴摩国(漢言常満)。太子下馬。……告言、汝便牽馬帰。……思欲剃頭髪、倉卒無有具、帝釈持刀来、天神受髪去。……即便見猟師駆遊被法衣、太子喜念言、此則真人衣、度世慈悲服、猟者何故着。心念欲貿易成我志所願便持金鏤衣、貿所法震越。猟者内歓喜、菩薩亦倶然、太子被震越。

④瑞応（大正03　p.475下）；行数十里、逢兩猟客。太子自念、我已棄家、在此山沢、不宜如凡人被服宝衣有慾態也、乃脱身宝裘、與猟者貿鹿皮衣。……到前下馬、遣車匿還。……当作沙門如菩薩法、天神奉剃刀鬚髪自堕、天受而去。

⑤異出（大正03　p.619中）；太子行数十里、道逢猟者。太子曰、我欲従卿有所債、寧可得耶、……猟者即以皮與太子、太子亦以珍物與之。……太子行数十里、駐馬而下、謂車匿、若従是而還。

⑥普曜（大正03　p.508上）；於時車匿夜送菩薩、菩薩脱身宝瓔奇珍以付車匿、持是還国。……遂進前行逢兩猟師、心自念之、吾已出家不與俗同、脱身所服貿鹿皮衣、着之而去。……天王知心、

飛天奉刀来、帝釈受髪則成沙門。

⑦方広（大正03　p.576上）；爾時菩薩去迦毘羅城、至彌尼国其夜已暁、所行道路過六由旬。……菩薩既行至彼往古仙人苦行林中、即便下馬慰喩車匿、……汝便可将乾陟俱還。……菩薩作是思惟、若不剃除鬚髪非出家法、乃従車匿取摩尼剣、即自剃髪。……爾時菩薩剃鬚髪已、自観身上猶着宝衣、即復念言、出家之服不当如是。時浄居天化作猟師、身着袈裟……即取袈裟授與菩薩、菩薩……即便與彼憍奢耶衣。

⑧LV.（Lef.　p.225,　溝口　p.203）；こうしてかの菩薩は出発してからシャーキャ族の国を過ぎ、クローディヤ（Kroḍya）(1)族の国を過ぎ、マッラ（Malla）族の国を過ぎ、夜が明ける頃（Kapilavastuから6yojuna離れた）マイネーヤ（Maineya）族の都アヌヴァイネーヤ（Anuvaineya）に到着された。そこでかの菩薩は彼の馬カンタカ（Kaṇṭhaka）から地面に降り立ち……チャンダカ（Chandaka）を呼んで言われた。チャンダカよ、行け。これらの装身具とカンタカを持って、ここから引き返せ、と。……かの菩薩にまた次の考えが浮かんだ。遍歴修行者になったからには、高く結い上げた頭髪を保つのは、いかがなものであろうか？そして、自分の刀で自分の頭髪を切って、それを空中に放り上げられた。……また、かの菩薩に次の考えが浮かんだ。遍歴修行者になったからには、これらのカーシー産の衣服（Kāśikāni vastrāṇi）を保つのは、いかがなものであろうか？……その時、浄居天の……神々（Śuddhāvāsakāyika）の一人の息子が、神の姿を消して、赤茶色の衣服を着て、かの菩薩の前に現れた。……そこで猟師の姿をしていたこの一人の神の息子は、かの菩薩に赤茶色の衣服を与え、カーシー産の衣服を受け取った。

⑨僧伽（大正04　p.122下）；是時菩薩右手執刀自剃頭髪。是時菩薩以宝衣貿鹿皮用作袈裟。是時菩薩復作是念。最是我応所着衣。

⑪仏讃（大正04　p.010下）；下馬手摩頭　汝今已度我　慈目視車匿　……　汝事我已畢　今且乗馬還　……　衆宝荘厳剣　車匿常執随　太子抜利剣

⑪仏讃（大正04　p.012上）宝冠篦玄髪　合剃置空中　……　太子時自念　荘厳具悉除　唯有素絵衣　猶非出家儀　時浄居天子　知太子心念　化為猟師像　持弓佩利箭　身被袈裟衣　……

⑫BC.（06－01）；……世界の眼である太陽が一瞬にして昇ったとき、この男のなかのすぐれたるものは、ブリグ仙の後裔（Bhārgava）の庵の一角を見た。……自ら恭順を旨としながら、馬より降りた。……お前はほんとうに私のためによいことをしてくれた。いまや馬を連れて引き返しなさい。

⑫BC.（06－57）；そして、青蓮の花弁のように青光りする剣を引き抜くや、（頭から）彼は毛髪もろともきらびやかな冠を切り落とし、あたかもハンサを湖に放つごとく、……房々した髪のはためく冠を天に向かって投げかけた。

⑫BC.（06－59）；……彼は（このようにして）豪華な装飾品と別居し……黄金色のハンサを刺繍した絹の衣が眼に入ると、……（質素な）装束を（手に入れたいと）願った。すると、この彼の意中を知った本性浄らかな一人の天人は、鹿の狩人の相をなし、オレンジ色の衣（袈裟衣）をまとって、近くにやってきた。シャカ族の王子は、「……私にその衣をくださいませんか。（その代わりに）私はこれを（あなたに）さしあげましょう」と。

⑬行経（大正04　p.069上）；即便下馬　入山沢中　心懐歓喜　弁已大事……金鞘明珠靶　抜剣如抽虺　自以剃其頭　天敬接髪去

⑬行経（大正04　p.070中）；行且自思惟　不宜着綵服　忽見釈化作　猟師被袈裟　太子因語曰　服非汝宜　取吾金綵衣　卿袈裟與我

⑭過去（大正03　p.633中）；爾時太子、次行至彼跋伽仙人苦行林中。……即便下馬、……又語車匿、……我今既已至閑静処、汝便可與揵陟俱還宮也。……爾時太子、便以利剣、自剃鬚髪、即発願言。今落鬚髪、願與一切、断除煩悩及以習障。釈提桓因、接髪而去。……爾時太子、剃鬚髪已、

自見其身所着之衣、猶是七宝、即心念言。過去諸仏出家之法、所着衣服、不当如此。時浄居天、於太子前、化作猟師。……即脱宝衣、而與猟者、自被袈裟、依過去諸仏所服之法。

⑮集経（大正03　p.733下）；爾時太子見此樹林、乃往仙人所居之処。……是時太子従其馬王乾陟而下。……爾時太子、従車匿辺、索取……七宝把刀、……螺髻之髪、……割取、……擲置空中、……有一華鬘、名須曼那、……下化作一浄髪師、……剃於太子無見頂相紺螺髻髪。……爾時太子、自解其身一切瓔珞及以天冠、剃去髪鬚、剪落既訖、観於體上、猶有天衣、……此衣非是出家之服。……時浄居天、……応時化作猟師之形、身着袈裟染色之衣。……是時化人、即與菩薩袈裟之衣、従菩薩取迦尸迦衣、價数直於百千金者。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.164,　JonesⅡ　p.159）；カピラヴァストゥ（Kapilavastu）の南方へ１２ヨージャナ（dvādaśayojana）を馬に乗り、マッラ（Malla）国のアノーミヤ（Anomiya）という所のヴァシシュタ（Vaśiṣṭha）仙人住所から遠からぬところまで向かい、そこで菩薩とチャンダカ（Chandaka）は停った。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.165,　JonesⅡ　p.161）菩薩にこのような考えが生じた。「このような頭髪をもったままで、どうして遊行者になることが出来ようか」そこで菩薩は自分のナイフで髪を切り落とした。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.195,　JonesⅡ　p.186）その時、浄居天（Śuddhāvāsa deva）は一人の黄衣を着けた狩人を作った。菩薩は彼の方に近づき言った。「自分のベナレス産の衣装（Kāśika）をとって、あなたの黄衣を私に下さい」

⑰衆許（大正03　p.947上）；説此語已即脱宝冠上妙衣服、告飡那曰。将我衣服及彼馬王帰奉父王。……即従座起合掌頂禮、挙手執剣如優鉢羅花葉、即自截髪擲虚空中、天主帝釈……以手接髪。……爾時菩薩而復思惟、我今落髪作沙門相、云何身上得袈裟衣。如是念已阿耨波摩城中、有一長者。（十子の辟支迦）……時帝釈……為一猟士、……乃以袈裟奉上菩薩。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.007中）；菩薩脱宝衣以付車匿。（出瑞応本起経）……天王知心持刀来、帝釈受髪、則成沙門。（出普曜経）

①釈迦（大正50　p.025上）；爾時太子次行至彼跋伽仙人苦行林中……爾時太子便以利剣自剃鬚髪……爾時太子剃鬚髪已自見其身。所著之衣猶是七宝……。（出因果経）

③氏譜（大正50　p.091上）；経云。太子至閑静林、以宝冠明珠瓔珞厳飾具、與車匿已。……以剣自剃鬚髪、作是誓言願共一切除断煩悩、于時天帝接髪而去……又念過去諸仏法、衣不以七宝、浄居天知已、化作猟師身服袈裟、菩薩即以宝衣而用貿之。智度論云、所貿得衣、麁布僧伽梨也。

④統紀（大正49　p.144中）；行至跋伽仙人苦行林中、即便下馬語車匿言。……太子即就車匿、取七宝剣自剃鬚髪、而発願言、願共一切断除煩悩及以習障、帝釈接髪而去。……時浄居天化作猟師身被袈裟、太子見已而語之曰、……我今持此七宝之衣。與汝貿易。

⑥Bigandet.（vol.Ⅰ　p.064,　赤沼　p.087）；菩薩はこの夜の中に、……馬を馳すること三十由旬、やがて阿奴摩河（Anauma）の岸にいたり給うた。……菩薩は衣服を脱ぎ、車匿を呼びてこれに与え、これより健渉（Kantika）と共に衣服珠宝を携えて宮城に帰る様にと命じ給うた。……太子は又今や髪も鬚も不要のものである。沙門には不似合のものなれは却って捨てるがよいと決し給うて、自ら剣を抜き、片手に頭髪をとりて、一刀にてこれを切り給うた。

（1）Koliyaか。

【18】バッガヴァ仙人を訪問する

出家した菩薩がバッガヴァ（Bhaggava）仙人（あるいはヴァシシュタ〔Vaśiṣṭha〕仙人）のところを訪れる。

［A］原始聖典

④雑阿含604（大正02　p.167上）；此処是仙人所稽請処。

⑪根本有部律「薬事」（大正24　p.030下）；爾時世尊告阿難陀曰。我為菩薩時、此処往昔有仙人。名跋伽婆。請我令坐以花果供養。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.118上）；爾時菩薩既剃頭被袈裟已、於林野中処処遊行、至婆伽婆仙人所。見其仙人以掌支頰思惟而住。菩薩問曰、大仙、何故作此思惟……。

［B］仏伝経典

⑦方広（大正03　p.576下）；別車匿已、安詳徐歩、経彼跋渠仙人苦行林中。

⑪仏讃（大正04　p.010下）；須臾夜已過　……　林樹間　跋伽仙人処　……　見彼仙人　是所応供養　……　安詳而諦歩　入於仙人窟

⑫BC.（06－01）；それから（まもなく）、世界の目である太陽が一瞬にして昇ったとき、この男のなかのすぐれたるものは、ブリグ仙の後裔（Bhārgava）の庵の一角を見た。

⑬行経（大正03　p.070中）；林薮有梵志　隠居学神仙　……　於其中有一　智達梵志曰　……速疾可往詣　中清浄山林　於彼有仙士　名曰無不達　……　彼之所修学　豈能合仁意

⑭過去（大正03　p.634中）；爾時太子、即便前至跋伽仙人所住之処。……太子……更思惟。此諸仙人、雖修苦行、皆非解脱真正之道、我今不応止住於。

⑮集経（大正03　p.733中）；爾時太子従迦毘羅城門出已、勅其車匿作如是言。……向羅摩村行（異説；彌尼迦）。……至日出時、到跋伽婆仙人居処。……

⑮集経（大正03　p.745上）；爾時菩薩、従彼阿尼彌迦聚落、漸漸欲向於毘耶離中、路有一仙人居処、彼旧仙人名跋伽婆(隋言瓦師)。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.195,　JonesⅡ　p.186）；菩薩はヴァシシュタ（Vaśiṣṭha）仙人住所のある、苦行林（dharmāraṇya）に入っていった。

⑰衆許（大正03　p.947下）；爾時菩薩……漸次経行、見一仙人名婆哩誐嚩、以手搘頤顔容不悦。……菩薩思惟、城邑不遙、如釈種来必作魔難。即別仙人過殑伽河、往王舎城。……

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.026上）；爾時太子即便前至跋伽仙人所住之処。

③氏譜（大正50　p.091上）；経云。太子至跋伽仙林中……言論反覆乃至日暮明旦辞去。諸仙答曰。……可往北行、彼有大仙可就語論。

④統紀（大正49　p.144中）；跋伽仙人遙見太子、謂是天神、與衆請坐即問。……言論往復、明旦辞去。

【19】ビンビサーラ王と逢う

ビンビサーラ（Bimbisāra）王が高楼に立ち、菩薩の威厳にあふれて王舎城に入ってくる姿を目にし、パンダヴァ山にまで菩薩を訪ねて、王位を譲ることを申し出るが、断られる。

［A］原始聖典

①‘Suttanipāta’Vs.405～413（p.072）；出家して仏はマガダ国（Magadha）の王舎城（Rājagaha）に行かれた。高楼に立つBimbisāraは仏を見て、家臣たちに後を追わせた。

①‘Suttanipāta’Vs.414（p.073）；王舎城を出て仏はそこを住所としようとPaṇḍava山に行った。

④雑阿含604（大正02　p.167上）；此処瓶沙王與菩薩半国処。

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.779下）；著衣持鉢入羅閲城乞食。時摩竭王、在高楼上、諸臣前後囲遶。王遙見菩薩入城乞食、屈申俯仰行歩庠序、視前直進不左右顧眄。見已即向諸大臣……。時王語太子言、今可於此住、当分半国相與。菩薩報言、……

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.780上）；時乞食得已　聖還出城住　山名班荼婆

⑧五分律「受戒法」（大正22　p.102中）；於是漸漸遊行到王舎城……。時王與諸群臣於高楼上、遙見菩薩以為奇雅。顧語衆臣。未曾見聞若斯人比、必是神聖。咸皆白言……。

⑧五分律「受戒法」（大正22　p.102下）；菩薩乞食畢還波羅榇山、向波旬国結跏趺坐。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.118中）；渡弼伽河、漸次遊行至王舎城。……時頻毘娑羅王在楼観望、遙見菩薩行歩端正被如法僧伽胝衣捧持一鉢如法瞻視威儀庠序次第乞食。……

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.118下）；菩薩乞食已　黙然出城外　往彼般荼林　清浄自安止　使者知処已　即遣一人守　一報速還城　報彼国王曰　天王彼苾芻　今在般荼山　坐如猛虎児　処山如師子　王聞説是言　即登諸宝輅　群臣共囲繞　速詣彼所居　至彼般荼山　王従車輅下　歩行前往詣　便即覩菩薩

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.065,　南伝28　p.140）;〔かくして〕菩薩は出家された。その地方に阿奴夷（アヌーピヤ　Anūpiya）というアンバの樹林があった。其処で七日間を（sattāhaṃ）過し、一日に（ekadivasen' eva）三十由旬の道を（tiṃsayojanamaggaṃ）歩いて、ラージャガハ（Rājagaha）に入られた。……王は宮殿の高台に立って大士を見、……（役人に命じて、あとをつけさせた）。大士は……入った〔時に通った〕門から出て行ってパンダヴァ（Paṇḍava）山の蔭に、東の方に向って坐て、食事を初められた。……王は使者の言を聞いて、急いで都を出て菩薩の所へ行き、その勝れた威儀に敬服して、菩薩に一切の主権を譲り渡そうといった。

②修行（大正03　p.468中）；於是出国、小復前行、到摩竭国。……時国王瓶沙、即問臣吏。……於是王與群臣、出詣道士、遙見太子……。

④瑞応（大正03　p.476中）；太子自去、踰越名山、経摩竭界。瓶沙王出田猟、遙見太子、行山沢中。

⑥普曜（大正03　p.509中）；菩薩厳飾衣被第一顕現、手執応器、思惟無念、入羅閲祇欲行分衛。……衆人惟察人中之尊……往告瓶沙王。……時王聞之勅外厳駕、……尋便下車、……稽首禮足。

⑦方広（大正03　p.579上）；出毘舎離城漸次遊行、往摩伽陀国王舎大城、入霊鷲山独住一処。……時王……自陟高楼上　遙観菩薩身　相好甚端厳……於彼晨朝時　厳駕躬親謁。

⑧LV.（Lef.　p.239,　溝口　p.214）；ヴァイシャーリー（Vaiśalī）に心ゆくまでの期間留まってから、マガダ（Magadha）国の中に入った。この国の中を遍歴して都のラージャグリハ（Rājagṛha）に近づき、山々の王であるパーンダヴァ（Pāṇḍava）山の麓に到着した。……ビンビサーラ（Bimbisāra）王は夜が明けたのを見てから、大勢の家来に囲まれて、山々の王であるパーンダヴァ山の麓へ行った。……王はかの菩薩の足を頭に頂いて挨拶し、……。

⑪仏讃（大正04　p.019上）；太子辞王師　及正法大臣　冒浪済恒河　路由霊鷲巌　蔵根於五山　……　爾時瓶沙王　処於高観上　……　即勅厳駕行　……　恭歩漸親近

⑪仏讃（大正04　p.019中）；精麁随所得　持鉢帰閑林　食訖漱清流　楽静安白山

⑫BC.（10－01）；……王のいとし子は、（大王の）祭事と政治を司るこの両人を措いて、さざな

みゆれるガンガー（Gaṅgā）河を渡り、豪壮な家が軒を並べるラージャグリハ（Rājagṛha）に赴いた。……マガダ領主シュレーニャ（Śreṇya）は（道路に面した）外側の御殿から、（ときならず）群衆が波をなして一杯集まっているのを見て……彼はこの山（Pāṇḍava山）の上に結跏趺坐を組んで、……のごとき菩薩を見た。

⑫BC.（10－14）；それから彼は、（与えられて）得られたままに施物を受けとって、山の（なかの）人気なき小川の清流（のほとり）にいたり、そこで作法に則って（つつましく）食事を摂ってから、パーンダヴァ（Pāṇḍava）山（白山）に登っていった。

⑬行経（大正04　p.071上）；時度恒水已　……　入王舎分衞　……　爾時其国王　厥号為瓶沙　時処高観上　遙見太子行　……　於城外食訖　上槃塔名山　……　王至槃塔山　……　王至下宝車　歩歩而登山　見太子独坐

⑭過去（大正03　p.637上）；爾時太子、往彼阿羅邏迦蘭仙人住処、渡於恒河、路由王舎城。……如是諠譁。徹頻毘娑羅王。……王便厳駕、……至般茶婆山、遙見太子、……即便下馬、……前坐問訊太子。

⑮集経（大正03　p.758上）；爾時菩薩、従優陀羅羅摩子処、辞別而行。……向般茶婆山(隋言黄白色)。

⑮集経（大正03　p.758中）；爾時菩薩、従般茶山、安庠而行、至王舎城。……爾時摩伽陀国、王舎城主、姓施尼氏、名頻頭娑羅。……爾時頻頭娑羅王、在高楼上、……即従楼下、出宮門外、見菩薩身、威儀挙動、端正無匹。……

⑮集経（大正03　p.764下）；爾時菩薩、従般茶婆山林而出、……向伽耶城。既到彼已、登上伽耶尸梨沙山(隋言象頭)。……鋪草而坐。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.198,　JonesⅡ　p.189）；菩薩はアーラーダ・カーラーマ（Ārāḍa Kālāma）と別れ、ラージャグリハ（Rājagṛha）に向った。マガダ（Magadha）国王であるシュレーニヤ（Śreṇiya）は王宮のテラスから彼を見た。菩薩はパーンダヴァ（Pāṇḍava）山に向われた。王もパーンダヴァ山へ行き、菩薩に近づき挨拶するとともに一国の提供を申し出る。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.198,　JonesⅡ　p.189）；菩薩はパーンダヴァ（Pāṇḍava）に向われた。そしてそこで彼の住処が見出されることになる。

⑰衆許（大正03　p.947下）；時民彌娑囉王在高楼上、遙見菩薩身相端厳……国王知己躬自臨幸、接見。……

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.028下）；爾時太子往彼阿羅邏迦蘭仙人住処。（出因果経）

④統紀（大正49　p.144下）；時太子北度……恒河、路経王舎城中。瓶婆娑羅王……聞太子至、願捨国相奉。

⑤JM.（p.028, 畑中　p.104）；１日で30由旬の道を進み（ekadivasam eva tiṃsayojanikaṃ maggaṃ gantvā）、アサンガ・ガンガー（Asaṅga-gaṅgā）と呼ばれる河を渡って、アーサールハ月の黒分8日目に（Āsāḷhamāse kāḷapakkhassa aṭṭhamiyam）ラージャガハ（Rājagaha）には入り、乞食して廻り、……パンダヴァ（Paṇḍava）山の日蔭に坐って食べた。彼はビンビサーラ（Bimbisāra）王によって贈与された一切の王権を拒み、王に約束をして……。

⑤JM.（p.028, 畑中　p.183）；菩薩は５才年長（Bimbisārato pañcavassādhiko）、１５才で即位（paṇṇarasavassuddesikakāle katābhiseko）、５２年間治政（dvepaññāsavassāni rājjam kāresi）。

⑥Bigandet.（vol.Ⅰ　p.067,　赤沼　p.091）；菩薩はこれよりその地（阿奴比耶　Anupyia）を出立して三十由旬を離るる王舎城（Radzagio）へ向い給うた。……頻婆娑羅王（Peimpathara）は王宮より街上を眺め、鉢を手にして歩みを運び給う菩薩を認め、……官臣を遣してその旅人の行

状を一々注視せしめ……太子の許へ赴いた。

【20-01】２仙人を訪問する----アーラーラ・カーラーマ仙人を訪問する

菩薩がアーラーラ・カーラーマ（Āḷāra Kālāma）仙人を訪問して無所有処定を得るが、これに満足しないで去る(1)。

［A］原始聖典

①MN.026‘Ariyapariyesana-s.’（vol. I　p.163）；出家して善なるものを求め（kiṃkusalagavesin）、無上の寂静の境地を求めて（anuttaraṃ santivarapadaṃ pariyesamāna）、Āḷāra Kālāmaの所に行った。

①MN.036‘Mahāsaccaka-s.’（vol. I　p.240）；同上

①MN.085‘Bodhirājakakumāra-s.’（vol. II　p.093）；同上

①MN.100‘Saṅgārava-s.’（vol. II　p.212）；同上

③中阿含204「羅摩経」（大正01　p.776中）；更往阿羅羅伽羅摩所、問曰。阿羅羅、我欲於汝法行梵行為可爾不……。

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.780中）；時有人名阿藍迦藍、於衆人中為師首、與諸弟子説不用処定。時菩薩至阿藍迦藍所問言。汝今以何等法、……。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.119中）；詣歌羅羅仙所。既至彼已、合掌恭敬相対而坐。……無想定……。

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.066,　南伝28　p.142）；菩薩は王に承諾を与え、次第に遊行しつつ、アーラーラ・カーラーマ（Āḷāra Kālāma）〔仙〕とウッダカ・ラーマプッタ（Uddaka Rāmaputta）〔仙〕とを訪って禅定を得られたが、「これは菩提への道でない」と〔知り〕、……ウルヴェーラー（Uruvelā）に赴き……其処を安住の地として大精進に入られた。

②修行（大正03　p.469中）；諸道士。一名為阿蘭。二名為迦蘭。学来積年。四禅具足。獲致五通。見光驚怖。此何瑞応。便共出観。遙見太子是為悉達。今果出家。

⑥普曜（大正03　p.510中）；詣迦羅無提所。……獲無用虚空三昧……不至正覚、非是泥洹。……便捨之去。

⑦方広（大正03　p.578下）；（菩薩）次第至毘舎離城。城傍有仙名阿羅邏與三百弟子俱。……説無所有処定。……我時思惟仙人所説非能尽苦。

⑧LV.（Lef.　p.238,　溝口　p.213）；かの菩薩は旅を続けて大きな都ヴァイシャーリー（Vaiśālī）に到着した。ちょうどこの頃、アーラーダ・カーラーパ（Ārāḍa Kālāpa）も（声聞）達の大きな集団、及び三百人の弟子達を伴って、都ヴァイシャーリーの中に住いを建て、弟子達に法を教えていた。その法は感覚の抑制を伴う清貧に導くものであった。……アーラーダのこの教義は解放するものではなく……。

⑪仏讃（大正04　p.022中）；甘蔗月光胄　到彼寂静林　敬詣於牟尼　大仙阿羅藍　迦藍玄族子　……　安慰言善来　……　是無所有処　……　於阿羅藍説　不能悦其心

⑫BC.（12－02）；カーラーマ（Kālāma）姓のこの聖者は、遠方より彼を見つけるや、直ちに声高く「ようこそ」と呼びかけ、呼びかけられた王子はそのそばに近づいていった。……その結果、「何ものも存在しないのだ」とみるようになりますので、彼は「無一物（者）」と伝えられております。……このように彼はアラーダ（Arāḍa）の説く道を（この程度のものかと）さとって満

足できなかった。（そして）「（これはなお）不充分、不徹底である」と考えて、彼はそこより去っていったのであった。

⑬行経（大正04　p.074中）；如是菩薩　広肩長臂　安徐詳雅　師子応歩　詣阿蘭問

⑭過去（大正03　p.637下）；　爾時太子、即便前至彼阿羅邏仙人之所。

⑮集経（大正03　p.751下）；爾時菩薩、捨其父王大臣……漸漸前行、安庠而向毘舎離城……於其中路、有一仙人、修道之所、名阿羅邏、姓迦藍氏。……爾時菩薩、如是思惟、此之法者、不能令人得至涅槃。……即便背捨羅邏而行。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.198,　JonesⅡ　p.189）；菩薩はヴェーサーリー（Vaiśālī）に行き、アーラーダ・カーラーマ（Ārāḍa Kālāma）に身を寄せる。しかし彼の道は解脱への道ではないと考え、彼を離れてラージャグリハ（Rājagṛha）に赴く。

⑰衆許（大正03　p.948中）；爾時菩薩即往阿囉拏迦羅摩処而学道法。……有想天三摩地門……菩薩復思、今此行法而未究竟非為正道。即乃捨去。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.029下）；爾時太子即便前行、向彼阿羅邏仙人所住之処。（出因果経）

③氏譜（大正50　p.091中）；経曰。……王臣即留五人伺察所在、便度恒河路遊王舎、……遂至迦蘭仙所。交論非奪、亦如上説。

④統紀（大正49　p.144下）；太子前行至阿羅邏仙人処。聞説従得初禅、乃至入非想非非想処、名為解脱。太子知非究竟、即與仙別。

⑤JM.（p.028, 畑中　p.105）；アーラーラ・カーラーマ（Āḷāra-Kālāma）とウッダカ・ラーマプッタ（Uddaka-Rāmaputta）に近づいて、諸々の定を生ぜしめた。

⑥Bigandet.（vol.Ⅰ　p.070,　赤沼　p.094）；菩薩は王に別辞を告げて、その旅をつづけ、阿羅羅（Alara）と呼ぶ隠者にめぐりあい、いろいろの禅定のことについて尋ね給うた。阿羅羅は第四禅定までのことについては菩薩を満足し奉るように語り得たが……。

（1）無所有処定以外の教えを受けたとするものもある。

【20-02】２仙人を訪問する ----ウッダカ・ラーマプッタ仙人を訪問する

菩薩がウッダカ・ラーマプッタ（Uddaka Rāmaputta）仙人を訪問して非想非非想処定を得るが、これに満足しないで去る。

［A］原始聖典

①MN.026‘Ariyapariyesana-s.’（vol.Ⅰ　p.165）；出家して善なるものを求め（kiṃkusalagavesin）、無上の寂静の境地を求めて（anuttaraṃ santivarapadaṃ pariyesamāna）、Uddaka Rāmaputtaの所に行った。

①MN.036‘Mahāsaccaka-s.’（vol.Ⅰ　p.240）；同上

①MN.085‘Bodhirājakakumāra-s.’（vol.Ⅱ　p.093）；同上

①MN.100‘Saṅgārava-s.’（vol.Ⅱ　p.212）；同上

③中阿含204「羅摩経」（大正01　p.776下）；往詣欝陀羅羅摩子所、問曰。欝陀羅、我欲於汝法中学、為可爾不……。

④雑阿含604（大正02　p.167上）；此処問優藍弗仙人。

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.780中）；時有欝頭藍子、処大衆中而為師首。其師命終後、教

師諸弟子、與説有想無想定。時菩薩往欝頭藍子所問言。汝師以何等法教諸弟子。……

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.119中）；菩薩爾時遊行山林、見水獺端正仙子。旧云欝頭藍者此誤也。即往親近恭敬問訊。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.299下）；往空林所修出家業依止仙人学殊勝定離欲界欲。次従曷羅摩子習無所有定、断無所有処欲。

＊③中阿含114「優陀羅経」（大正01　p.603上）；優陀羅羅摩子、如是見如是説。有者是病是癰是刺。設無想者是愚癡也。若有所覚、是止息是最妙。謂乃至非有想非無想処。彼自楽身自受於身自著身已修習乃至非有想非無想処。身壊命終生非有想非無想天中。

［B］仏伝経典

①NK.（vol.Ⅰ　p.066，南伝28　p.142）；【20-01】に含む。

②修行（大正03　p.469中）；【20-01】に含む。

⑥普曜（大正03　p.510中）；菩薩遙見欝頭藍弗。……獲有想無想定。……藍弗無信、独吾有信。藍弗無精進念定意智慧、独吾有之。思惟是已便捨之去。

⑦方広（大正03　p.580上）；王舎城辺有一仙人、摩羅之子名烏特迦、與七百弟子俱。常説非想非非想定。……菩薩作是思惟、……非厭離法、……非涅槃法。

⑧LV.（Lef.　p.243，溝口　p.219）；ちょうどこの時期に、ラーマの息子ルドラカという者（Rudrako nāma Rāmaputra）が、ラージャグリハ（Rājagṛha）という都の中に隠棲していた。彼は七百人の弟子の集団と共に住んでいた。……その法は……（非想非非想処定）に導くものであった。……この道は嫌悪することに導かず、……ニルヴァーナ（nirvāṇa）にも導きません。（修行中の五比丘、菩薩に従う）

⑪仏讃（大正04　p.024上）；応行更求勝　往詣欝陀仙　……　離想非想住　更無有出塗　以衆生至彼　必当還退転　菩薩求出故　復捨欝陀仙

⑫BC.（12－84）；……つぎにウドラカ（Udraka）仙の庵に赴いた。でもこの人もまた霊魂（の存在）に固執していたので、彼はその教えに納得することがなかった。……さらにより以上のものを求めて、ウドラカ（仙）を捨てたのであった。（この後王仙ガヤ〔Gaya〕のナガリー〔Nagarī〕と名づける庵にその身を委ねた）

⑬行経（大正04　p.075上）；於是復詣　迦蘭問法　為説八意　菩薩即了　……　覚有是瑕　體解其意　是必還法　菩薩是故　捨迦蘭法

⑭過去（大正03　p.638中）；次至迦蘭所住之処、論議問答、亦復如是。太子即便前路而去。

⑮集経（大正03　p.757中）；爾時於此閻浮提地、復更別有一大導師、名曰羅摩、其命已終。彼徒衆主、即摩長子、名曰優陀羅羅摩子、……説生非想非非想法。近王舎城、一阿蘭若林中而住。……此法非是究竟、……即便背行。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.200，JonesⅡ　p.191）；菩薩はウドラカ・ラーマプトラ（Udraka Rāmaputra）と共に居る時、彼の道は解脱への道ではないと考えた。そこで彼から去り、ガヤー（Gayā）山に来た。--ガヤーシールシャ（Gayāśīrṣa）--ウルヴィルヴァー（Uruvilvā）

⑰衆許（大正03　p.948中）；往烏捺囉迦囉摩子処学修法行。……至非非想処三摩地門。……此之法行亦未究竟非真覚路、速須捨彼別求明道……。

［C］後世の仏伝資料

④統紀（大正49　p.144下）；次至迦蘭住処。論議問答。亦復如是。太子調伏二仙人……。

⑤JM.（p.28，畑中　p.105）；【20-01】に含む。

⑥Bigandet.（vol.Ⅰ　p.071，赤沼　p.094）；第五禅定のことについては余儀なく、菩薩を鬱陀羅仙（Oudaka）の許に行かしめねばならなんだ。鬱陀羅はこれを充分に説明して聞かせた。菩薩は

今やこれらの師匠から何も学ぶべきものがないので……この黙想に身を委ねてみ様と決心し給うた。

【21－01】苦行----ウルヴェーラーへ

菩薩がウルヴェーラー（Uruvelā）のセーナーニ村（Senānigama）へ行き、苦行に入る(1)。

［A］原始聖典

①MN.026‘Ariyapariyesana-s.’（vol. I　p.166）；出家して善なるものを求め（kiṃkusalagavesin）、無上の寂静の境地を求めて（anuttaraṃ santivarapadaṃ pariyesamāna）、マガダ国を遊行しながら、UruvelāのSenānigamaに入った。

①MN.036‘Mahāsaccaka-s.’（vol. I　p.240）；同上

①MN.085‘Bodhirājakakumāra-s.’（vol. II　p.093）；同上

①MN.100‘Saṅgārava-s.’（vol. II　p.212）；同上

①‘Apadāna’03－39－387（p.301）；その業の熟するままに、私は数多くの苦痛を舐めて、ウルヴェーラーで６年を過ごし、その後に私は悟りに達した（tena kammavipākena acariṃ dukkaraṃ bahuṃ chabbassān' Uruveḷāyaṃ tato bodhim apāpuṇiṃ ）。

③中阿含204「羅摩経」（大正01　p.777上）；往象頂山南欝鞞羅梵志村名曰斯那。於彼中地至可愛楽、山林欝茂、尼連禅河清流盈岸……。

⑥増一阿含16－08（大正02　p.580中）；設吾無此二力（忍力・思惟力）者……終不於優留毘処六年苦行。亦復不能降伏魔怨成無上正真之道。坐於道場以我有忍力・思惟力故、便能降伏魔衆成無上正真之道。

⑥増一阿含31－08（大正02　p.670下）；我昔未成仏道時。爾時依彼大畏山而住……。我六年之中勤苦求道而不剋獲。或臥荊棘之上、或臥板木鐵釘之上、或懸鳥身體遠地兩脚在上而頭首向地、或交脚跱踞……。

⑥増一阿含41－11（大正02　p.744上）；当知我昔日未成仏道在優留毘六年勤苦。不食美味身體羸瘦如似百年之人。

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.780下）；従摩竭界遊化南至象頭山、詣欝毘羅大将村中、見一浄地。……見已便生念言。夫為族姓子、欲求断結処、此是好処。我今求断結処、此処即是。我今寧可於此処坐而断結使。時有五人追逐菩薩、念言。若菩薩成道当與我等説法。爾時欝鞞羅有四女、一名婆羅、二名欝婆羅、三名孫陀羅、四名金婆伽羅、皆繋心菩薩所。若使菩薩出家学道、我等当為弟子。若菩薩不出家学道、在家習俗者、我等為妻妾。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.119下）；我今欲於林間静住。不可令其多人囲繞而求甘露。然我応留侍者五人、余者放還。是時菩薩、於母宗親中而留兩人、於父宗親中而留三人、而此五人承事菩薩、余者各令還国。爾時菩薩、與此五人囲繞、往伽耶城南、詣烏留頻螺西那耶尼聚落、四辺遊行於尼連禅河辺、見一勝地……。

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.067，南伝28　p.142）；菩薩は……大精進に勤もうと思って、優楼頻羅（Uruvelā）に赴き、……そこを安住の地として大精進に入られた。

②修行（大正03　p.469中）；復前到斯那河。

④瑞応（大正03　p.476下）；既歴深山、到幽閑処。

⑦方広（大正03　p.580下）；次第巡行至優楼頻螺池側東面、而視見尼連河。

⑧LV.（Lef.　p.248,　溝口　p.223）；かの菩薩は心ゆくまでガヤー（Gayā）の町に、ガヤーシールシャ（Gayāśīrṣa）山の上に留まられてから、……ウルヴィルヴァー（Uruvilvā）のセーナーパティ村（Senāpatigrāmaka）へ向って歩いていき、……ナイランジャナー（Nairañjanā）という河を見られた。

⑪仏讃（大正04　p.024中）；更求勝妙道　進登伽闍山　城名苦行林　五比丘先住

⑫BC.（12－90）；……この聖者は、ひたすら孤独を愉しんで、ナイランジャナー（Nairañjanā 尼連禅河）河のほとりに……住んだ。

⑬行経（大正04　p.075上）；於是便至　尼連禅江

⑭過去（大正03　p.638中）；爾時太子、調伏阿羅邏迦蘭二仙人已、即更前進迦闍山苦行林中、是憍陳如等五人所止住処。即於尼連禅河側、静坐思惟。

⑮集経（大正03　p.765上）；如是前行、至伽耶南有一聚落。其聚落、名優婁頻螺、……到一村主長者之家。然其長者、名難提迦(随言自喜)……。自喜村主有一善女、名須闍多(随言善生)……。時善生女、……、従菩薩手、而取瓦器入自家中、満盛香美甘味飲食。……

⑰衆許（大正03　p.948下）；菩薩即時将此五人、往誐耶仙人聚落、名烏嚕尾螺西曩野禰。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.007中）；大善権経云。……菩薩往至尼連水辺、閑居寂然。

⑤JM.（p.28, 畑中　p.105）；そして、「これは菩提への道ではない」と〔解って〕ウルヴェーラー（Uruvelā）に行き、そこで６年間苦行の大精進に励んだ。

（1）苦行の年数については、本研究の第１号中の「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」のpp.109～114を参照されたい。

【21－02】苦行----５人の侍者が菩薩と共に苦行に入る

浄飯王が派遣した５人の侍者（もとからウルヴェーラーにいたとするものもある）と共に苦行に入る。

［A］原始聖典

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.119下）；時浄飯王憶念菩薩令使尋訪相望道路、在所山林悉皆知処。既聞太子辞彼水獺無有侍者独行山林、即差童子三百人往侍太子。天示城王既聞是事。復差二百童子往侍太子。如是五百童子囲繞菩薩於諸山林随意遊観。爾時菩薩便作是念。我今欲於林間静住。不可令其多人囲繞而求甘露。然我応留侍者五人餘者放還。是時菩薩於母宗親中而留両人、於父宗親中而留三人而此五人承事菩薩。餘者各令還国。

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.067,　南伝28　p.142）；かの憍陳如（コンダンニャ　Koṇḍañña）を長とする五人の出家等も、大小の村邑王城などを行乞し廻って、此処で菩薩に巡り合った。〔そして〕この後六年、菩薩が大精進をされる間、彼等は「今に仏となられるであろう……」と思って、室を掃除したり、その他大小の勤をして仕えて、菩薩の従僕となった。

④瑞応（大正03　p.476上）；於是阿若拘隣等五人、受命追太子、及於深山、随侍数年、太子不與語。

⑤異出（大正03　p.620上）；五子追求太子、得之於名山、随而侍之。如是数歳、太子亦不問五人

所従来。太子所行者。皆窈林之処。
⑥普曜（大正03　p.509中）；菩薩遂進深入名山、五人追之不能及逮。
⑦方広（大正03　p.580中）；爾時菩薩出王舎城、與五跋陀羅……向尼連河次伽耶山。
⑧LV.（Lef.　p.245,　溝口　p.221）；ちょうどこの時、良い家柄（出身）の五人の人物が、ラーマの子ルドラカ（Rudraka Rāmaputra）のもとで清浄行を実践していた。……この良い家柄出身の五人はラーマの子ルドラカのもとを離れて、かの菩薩に付き従った。
⑪仏讃（大正04　p.024中）；更求勝妙道　進登伽闍山　城名苦行林　五比丘先住　見彼五比丘　善摂諸情根　持戒修苦行　居彼苦行林　尼連禅河　……　五比丘知彼　精心求解脱　尽心加供養　……　謙卑而師事　進止常不離
⑫BC.（12－91）；彼は（そこで）、彼（がくるより）以前から、（そこに住んでいて、自らの）五官制御力のほどを誇りながら、苦行に専念し、誓いの行に身を委ねている五人の比丘に会った。一方、解脱を求めていたこれらの比丘たちは、そこで彼を見るや、彼に近づき侍ったが……。
⑰衆許（大正03　p.948下）；【21-01】に含む。

［C］後世の仏伝資料
③氏譜（大正50　p.091中）；太子調伏二仙人已、進伽闍山苦行林。憍陳如五人住処。

【21－03】苦行----６年間の苦行
菩薩は６年の間、断食などの厳しい修行をする。

［A］原始聖典
①MN.012‘Mahāsīhanāda-s.’（vol.Ⅰ　p.077）；舎利弗よ、私は苦行者（tapassin）、最高の苦行者（paramatapassin）、貧穢行者（lūkha）、最高の貧穢行者（paramalūkha）、嫌悪行者（jegucchin）、最高の嫌悪行者（paramajegucchin）、独住行者（pavivitta）、最高の独住行者（paramapavivitta）であったことを認める。以下断食等の記述が続く。
①MN.036‘Mahāsaccaka-s.’（vol.Ⅰ　p.245）；私は断食を修そう。……
①MN.085‘Bodhirājakakumāra-s.’（vol.Ⅱ　p.093）；同上
①MN.100‘Saṅgārava-s.’（vol.Ⅱ　p.212）；同上
④雑阿含604（大正02　p.167上）；此処菩薩六年苦行。
⑥増一阿含31－08（大正02　p.670下）；是時我復作是念、今可食麻米之余。爾時日食一麻一米。形體劣弱、骸骨相連、頂上生瘡、皮肉自墮、猶如敗壊瓠盧……。
⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23　p.717上）；爾時菩薩於六年中一無所有、修苦行。
⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.156下）；爾時世尊先六年苦行然後成無上覚。

［B］仏伝経典
①NK.（vol.Ⅰ　p.067,　南伝28　p.143）；菩薩は「極端な苦行をしよう」と思って、唯一粒の胡麻や米を摂って一日を過され、或は全く食を断たれることもあった。
②修行（大正03　p.469下）；於是菩薩坐娑羅樹下、便為一切志求無上正真之道。諸天奉甘露、菩薩一不肯受。自誓日食一麻一米、以続精気、端坐六年。形體羸瘦、皮骨相連、玄精静寞、寂黙一心、内思安般。
④瑞応（大正03　p.476下）；天神進食、一不肯受。天令左右、自生麻米。日食一麻一米、以続精気、端坐六年。形體羸瘦、皮骨相連、玄清靖漠、寂黙一心、内思安般。

⑥普曜（大正03　p.511上）；於時菩薩作是思惟、六年之中示大勤苦精進之行。日服一麻一米。……爾時菩薩定坐六年、現勤苦行、教授開化十二載天人、立之三乗。以是之故、坐六年耳。

⑦方広（大正03　p.581中）；菩薩爾時修如是等最極苦行。……食一米乃至一麻。……菩薩六年苦行之時、於四威儀曾不失壊。

⑦方広（大正03　p.582中）；爾時菩薩六年苦行。魔王波旬常随菩薩、伺求其過而不能得。

⑧LV.（Lef.　p.250,　溝口　p.225）；……かの菩薩は、このように熟慮した後に、六年間（ṣaḍ-varṣikaṃ）にわたる恐るべき苦行の実践を始められた。

⑧LV.（Lef.　p.260,　溝口　p.236）；六年間にわたって悪魔パーピーヤス（Pāpīyas）は、かの菩薩の後ろに……付き随って、機会を求め、……しかし悪魔はどんな機会も見つけることができなかった。

⑨僧伽（大正04　p.137下）；是時語世尊言。汝本六年勤苦学道、日食一麻一米、猶不得道、況今随心口自恣言得道耶。

⑪仏讃（大正04　p.024中）；専心修苦行　節身而忘餐　……　遂経歴六年　日食一麻米　形體極消羸　……　苦形如枯木　垂満於六年

⑫BC.（12－94）；そこで彼は、死と誕生に終止符を打つためにはこれが（然るべき）手だてであろうと考え、食を断つことによって行じがたき苦行をはじめた。……六年間（varṣāṇi ṣaṭ）、ひたすら心の平安を得ようと欲して、彼は自分の身体をやせ細らしめた。

⑬行経（大正04　p.075上）；於是便至　尼連禅江　修治浄行　求禅処坐　……　日進一麻　半粒粳米　日日省食　久羸形體　……　具満六年

⑭過去（大正03　p.638中）；爾時太子、調伏阿羅邏迦蘭二仙人已、即便前進迦闍山苦行林中。是憍陳如等五人所止住処。……宜応六年苦行、而以度之。……日食一麻一米。

⑮集経（大正03　p.765中）；爾時菩薩、従善生女、乞得食已、……漸到一処。……見此地已。如是思惟。……令諸衆生求解脱者、悉行種種衆雑苦行。

⑮集経（大正03　p.771中）；爾時菩薩六年既満、至春二月十六日時。

⑯MV.（vol.Ⅱ　p.204,　JonesⅡ　p.194）；全行為を停止して（karmakṣaye）森の中で六年間の苦行生活（ṣaḍvarṣā duṣkaram）を送った時、この選ばれた人は、彼のたどっている道は解脱への道ではないと考えるようになった。

⑰衆許（大正03　p.948下）；菩薩即時将此五人、往誡耶仙人聚落、名烏嚕尾螺西曩野禰。……尼連河次見一林野地土……即於樹下結跏趺坐、学修禅観、閉口齧歯舌拄上齶。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.007中）；思惟六年示大勤苦、日服一麻一米。（出普曜経）

①釈迦（大正50　p.030中）；宜応六年苦行而以度之。（出因果経）

②歴代（大正49　p.024）；壬戌十八仏本行集経云。菩薩六年苦行既満至春二月十六日。

③氏譜（大正50　p.091中）；尼連河側、静慮六年度苦行者。天献麻米浄心守戒、日食一麻米、或七日食一麻米。

④統紀（大正49　p.144下）；伽闍山苦行林中憍陳如等五人住処、於泥連禅河側、静坐思惟。宜応六年苦行以度衆生……天神進食一不肯受。……日食一麻一米以続精気、端座六年、形体羸瘦。

⑤JM.（p.028, 畑中　p.105）；そして、「これは菩提への道ではない」と解って、ウルヴェーラー（Uruvelā）に行き、そこで６年間苦行（chabbassāni dukkarakārikaṃ）の大精勤に励んだ。

⑥Bigandet.（vol.Ⅰ　p.071,　赤沼　p.094）；この目的を成しとげるために、菩薩は優留毘羅林（Ourouwela）の閑寂の場所に赴き、最深の黙想に入りて夜と日とを費やし給うた。……かれこれしている中に思惟黙想の六年は終ろうとした。

【22－01】苦行を捨てる----苦行が悟りに役立たないと知る

菩薩は若き日の樹下の禅定を想起して、苦行が成道に役立たないことを知り、食事を摂る決心をする。

［A］原始聖典

①MN.012‘Mahāsīhanāda-s.’（vol. I　p.081）；私は苦行したけれども、最上知見（alamariya-ñāṇadassana）に達することができなかった。

①MN.036‘Mahāsaccaka-s.’（vol. I　p.247）；極度に痩せてしまった身体では悟りに到達するのは容易ではない（na kho taṃ sukaraṃ sukhaṃ adhigantuṃ evaṃ adhimattakasimānaṃ pattakāyena）。粥のような食物を取ろう（yan nūnāhaṃ oḷārikaṃ āhāraṃ āhāreyyaṃ odanakummāsaṃ）。

①MN.085‘Bodhirājakakumāra-s.’（vol. II　p.093）；同上

①MN.100‘Saṅgārava-s.’（vol. II　p.212）；同上

⑥増一阿含31－08（大正02　p.671下）；爾時我復作是念。不可以此羸劣之體、求於上尊之道。多少食精微之気、長育身體気力熾盛、然後得修行道。当食精微之気。

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.781上）；然我不由此自苦身得楽法。我今寧可食少飯麨得充気力耶。爾時菩薩、於異時食少飯麨、得充気力。

⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23　p.911上）；是時菩薩住阿蘭若於六年中修苦行已、知是無益徒為労倦。

⑪根本有部律「出家事」（大正23　p.1026下）；六年苦行、都無所獲。随意喘息、便飡美味乳酪等食。酥油塗身、以香湯浴。便即往詣軍営聚落。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.121中）；我所受苦無人超過、此非正道非正智非正見、非能至於無上等覚。……我今不能善修成就。何以故。為我羸弱然。我応為随意喘息、広喫諸食飯豆酥等、以油摩體温湯澡浴。是時菩薩作是念已、便開諸根随情喘息、飲食諸味而不禁制、塗拭沐浴縦意而為。

⑪根本有部律「雑事」（大正24　p.299下）；更無導者便於六年専修苦行、不別證悟将為無益。

＊①SN.04－01（vol. I　p.103）；私は苦行を離れた（Mutto vatamhi tāya dukkarakārikāya）。利益をもたらさない苦行を離れたのは実によかった（sādhu mutto vatamhi tāya anattha-saṃhitāya dukkara-kārikāya）。

＊④雑阿含1094（大正02　p.287下）；我今解脱苦行。善哉、我今善解脱苦行。

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.067,　南伝28　p.144）；大士が六年の苦行（chabbassāni dukkarakāriyaṃ）をなされたことは恰も空中に結目を作らんとするのと同じであった。菩薩は「この苦行は菩提への道ではない」〔ことを知って、〕滋養分のある食物を摂るために、大小の村邑を行乞して食を得られた。

⑦方広（大正03　p.583上）；復作是念。我今行此最極之苦、而不能證出世勝智、即知苦行非菩提因。（昔父王の園中での「若き日の禅定」を想起）……我今将此羸痩之身不堪受道、……是故我今応受美食令身有力。

⑧LV.（Lef.　p.263,　溝口　p.238）；これ（苦行）は智慧の道ではない。これは未来において、生・老・病・死を生み出すことを消失させるに至るための道ではあり得ない。（若き日の禅定を

想起）……完全な智慧を身につけることに導くこの道は、肉体を疲労困憊させることによって獲得できるものではない。……充分な食べ物を摂って、私の体に力を回復させた後に、私は「悟りの場」に近づくことができるであろう。

⑪仏讃（大正04　p.024中）；自惟非由此　離欲寂観生　（若き日の禅定を想起）　……　道非羸身得　……　飲食充諸根　根悦令心安　……　如是等妙法　悉由飲食生

⑫BC.（12－101・102）；「この（苦行によって）善業・功徳を積まんとする道は、離欲、さとり、解脱に導くものではない。（かつて）私があのときジャンブの樹の下で到達したやり方が、（もっと）確実なものである。ところで、この仕方は（体）力が弱くては到達できない」と（自身を）顧みて、体力増強のためにさらにつぎのように考えた。

⑭過去（大正03　p.639上）；修於苦行、垂満六年、不得解脱、故知非道。（若き日の禅定）……我当受食然後成道。

⑮集経（大正03　p.770上）；（若き日の禅定を想起）菩薩更復如是思惟。我欲成就知見楽者、応得生楽。但我羸瘦無有気力、……我今可為身求力故、而食麤食。

⑰衆許（大正03　p.949中）；今此所作亦非正行、於無上道而不相応。（若き日の禅定）……即取飲饌并湯藥等、節次服食、……澡浴眠寝安適身心増長勢力。

［C］後世の仏伝資料

③氏譜（大正50　p.091中）；経云。菩薩自念、我今苦行形如枯木、将満六年不得解脱。憶昔禅定是最真正。為滅外邪自餓非道、我当受食然後成仏。

⑥Bigandet.（vol. I　p.075,　赤沼　p.100）；菩薩は以上の経験に依って、断食と苦行とが、仏陀の証を開くためには価値のないものであることをさとり、鉢を取って食を乞わんが為に隣の村に赴き給うた。

【22－02】苦行を捨てる----５人の侍者が菩薩を見捨てる

菩薩が苦行を捨てたので、共に苦行していた５人の侍者が菩薩を見捨てて去る(1)。

［A］原始聖典

①MN.036‘Mahāsaccaka-s.’（vol. I　p.247）；粥を取ったとき、５人の比丘たちたちは私を厭い、離れていった（atha me te pañca bhikkhū nibbijjāpakkamiṃsu）。

①MN.085‘Bodhirājakakumāra-s.’（vol. II　p.093）；同上

①MN.100‘Saṅgārava-s.’（vol. II　p.212）；同上

⑥増一阿含31－08（大正02　p.671下）；時五比丘捨我還退、此沙門瞿曇性行錯乱以捨真法而就邪業。当我爾時即従坐起、東向経行。

⑦四分律「受戒揵度」（大正22　p.781上）；時菩薩食少食時、五人各各厭捨而去。自相謂言、此瞿曇沙門狂惑失道、豈有真実道耶。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24　p.121下）；于時其五侍者互相謂曰。此沙門喬答摩、懈怠懶墮而懐多事、受用無度断惑錯乱、今既広喫食飲豆酥油塗拭澡浴。今不能少許證獲、必無所得。便捨菩薩漸次而行。

［B］仏伝経典

①NK.（vol. I　p.067,　南伝28　p.144）；五群比丘たちは、「この六年（Chabbassāni）の苦行をしても一切智は獲られなかった〔のに〕、今村里を行乞して滋養分のある食物を得る〔ような〕

人が、如何して〔一切智を成就することが〕出来よう。彼は豪奢で精進を放棄して了ったのだ。……」といって大士を見棄て、……、イシパタナ（Isipatana）に入った。

④瑞応（大正03　p.476上）；五人苦之言。此狂人耳、何道之有、行不択路、奚可随也。設委還者、王滅吾家、不如止此。五人所止、有好泉水、甘果不乏。

⑤異出（大正03　p.620上）；五人患而告之、自相謂言。是王太子、不行学道、病狂癡耳、行不択道、我五人不能随。還者王滅吾家、不如於此而止。

⑦方広（大正03　p.583上）；時五跋陀羅既聞菩薩欲受美食咸作是念。沙門瞿曇如是苦行尚不能得出世勝智、況復今者欲食美食受楽而住。……便捨菩薩詣波羅奈仙人堕処鹿野苑中。

⑧LV.（Lef.　p.264,　溝口　p.239）；よい家柄出身の五人の者は心の中で思った。この行為によっても、また彼が獲得したことによっても、かの修行者ガウタマ（Gautama）が人間の法を越えた尊敬するべき知の見方〔見解〕の識別を明らかに示すに至るということは不可能であろう。それどころか、今日、彼は充分な食べ物を摂ると言う。……彼らはかの菩薩のいる所から去って、ヴァーラーナシー（Vārāṇasī）に赴き、リシパタナ（Ṛṣipatana）においてムリガダーヴァ（鹿野苑 Mṛgadāva）の森の中に居住した。

⑪仏讃（大正04　p.024下）；五比丘見已　驚起嫌怪想　謂其道心退　捨而択善居

⑫BC.（12－114）；……五人の比丘たちは、「彼は還俗してしまった」と考えて、思慮深き彼を捨ててしまった。

⑬行経（大正04　p.075中）；菩薩便起　増進飲食　長育其身　侍使五人　見菩薩食　捨棄避去

⑭過去（大正03　p.639中）；爾時五人、既見此事、驚而怪之。謂為退転。各還所住。

⑮集経（大正03　p.771上）；爾時菩薩、食麤食時、彼五仙人、共相謂言。悉達太子、今已失禅。……彼等如是平量訖已、……捨離菩薩、而別他行。漸至向於波羅奈国、入鹿野園、而修禅定。

⑰衆許（大正03　p.949中）；時彼五人而相謂曰。……於今恣情飲食、香油塗體澡身安寢、如是虧喪云何出離。……聞波羅奈国有鹿野苑、羅漢聖衆恒住其中、宜往彼処各求明道。

［C］後世の仏伝資料

①釈迦（大正50　p.031上）；爾時五人既見此事。（出因果経）

③氏譜（大正50　p.091下）；五人見驚謂為退転、各還所止。

④統紀（大正49　p.145中）；二人（憍陳如、十力迦葉）執五欲楽。見太子初食麻麥、心不忍可即便捨去。……三人（頞鞞、跋提、摩訶男俱利）執苦行浄。太子後知非道、捨而受食羹飯酥乳。三人謂其狂乱失志、亦復捨去。

⑥Bigandet.（vol. I　p.075,　赤沼　p.101）；然し今まで菩薩と共に林に住うて菩薩のために御給事を申し上げていた五人の比丘は語り合うには、「沙門喬答摩は六年の間苦行をして仏果を求めたがそれはすべて無益となった。……彼は食物の探索に出掛けた。……」ここに於て彼等は……菩薩を捨てて十八由旬を行きて、ベナレス（Baranathee）に近き鹿野苑（Migadawon）に入ったのである。

（1）菩薩の厳しい修行についていけないとして去ったとするものもある。［B］の④⑤である。